石垣項目別カルテ

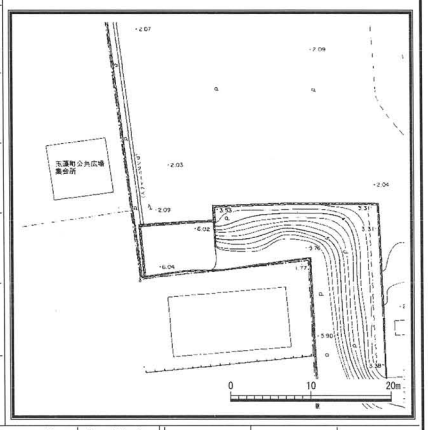
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約3.7m、全長は天端で約9.4mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材は丸みのあるものが多く見られる。規模は概ね40～50cm程度の標準的なものが用いられているが、大ぶりなものも用いられている。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角5石目の2石左側の石材に○・×が見られる。
破損状況	・間詰石のヌケが多く見られ、栗石が見えるほど深く抜けているところもある。 ・現状では安定しているものの、変形を起こしやすい状態にある。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・門として機能していた時期は新郭造築期までである。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりに天端に至る目地	左側	花崗岩	割石角張る	右側石材が小ぶり	割石乱積	左隅角部の積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	割石丸み		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5011	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内（桝形）				石積工法		乱積	
方　位	西				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.52	1.55	1.39	-	0.89	85	88	-	87	88

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

布積

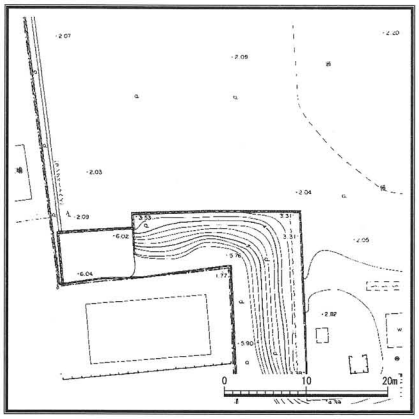
備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.4m、全長は天端で約1.5mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は小ぶりのものが用いられている。 ・左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、№5010石垣が東へ延びるように描かれており、明治以降に築造された石垣と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5012	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内（桝形）				石積工法		乱積、谷積、布積	
方　位	北				角石（算木）	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

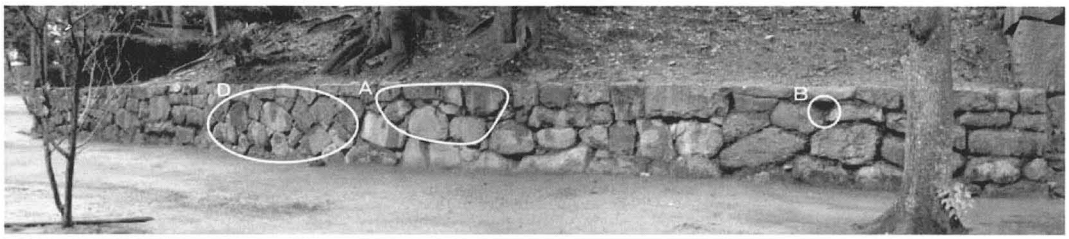


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			t1		s2				s1			a2	b2	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		20.16	0.78/20.55	1.19	1.26	1.4	78	84	87	85	85

築造時期	生駒期・明治以降	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



A．ズレ出し
B．間詰石のヌケ
C．小長形石材使用
D．谷積
E．石材、間詰石の詰め方が揃っている。（No.5013と同じ詰め方）
※布積、乱積、谷積と工法バラバラ。後世の全面的な改修か？

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

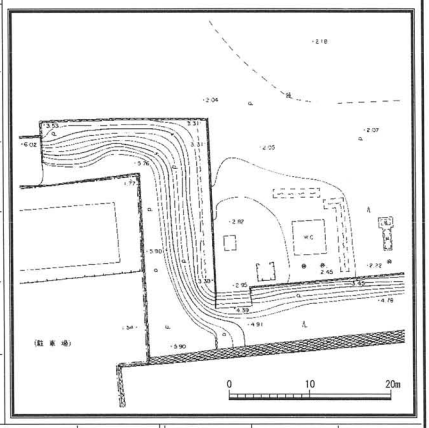
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.3m、全長は天端で約20.2mであるが、左端の基底部は約0.8m東へ延びており、本来はもっと長い石垣であった可能性が高い。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積であるが、谷積や布積も見られる。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は小ぶりのものが多く用いられている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣上部に石材のズレが見られる。 ・中段部に石材のワレが見られる。 ・間詰石のヌケが見られるが、概ね安定している。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によるとNo.5010石垣が東へ延びるように描かれており、明治以降にやや北側へ移動した可能性が考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角中段から天端に至る谷形目地	谷形中側	花崗岩	方形割石丸み	ほぼ同規模	割石乱積	左隅角部の積み直しか築造時のもの
	谷形外側	花崗岩	方形割石丸み		割石乱積	
笠石下の目地	上方	花崗岩	方形割石角張る	上方石材がやや小ぶり	割石布積	笠石の積み上げ
	下方	花崗岩	方形割石角張る		割石布積	
石垣中央部笠石から下方の谷形の目地	上方	花崗岩	方形割石角張る	ほぼ同規模	割石谷積	谷形部の積み直し
	下方	花崗岩	方形割石角張る		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5013	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内（桝形）				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

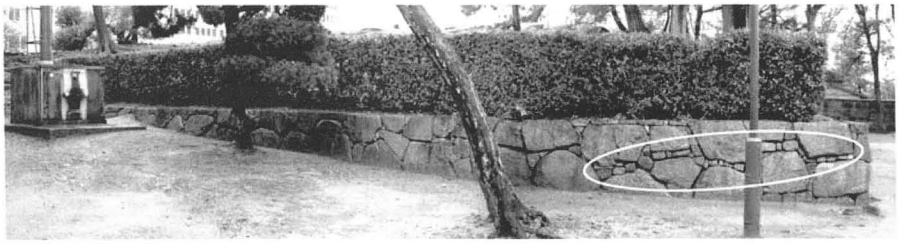


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

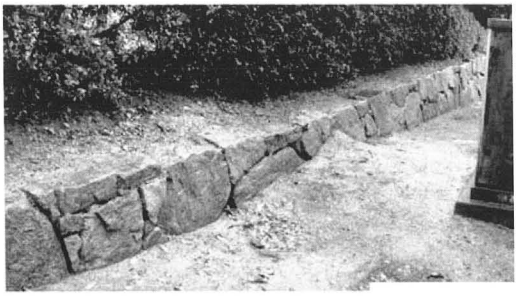
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	23.66	23.74	0.19	0.7	1.17	－	80	77	80	78

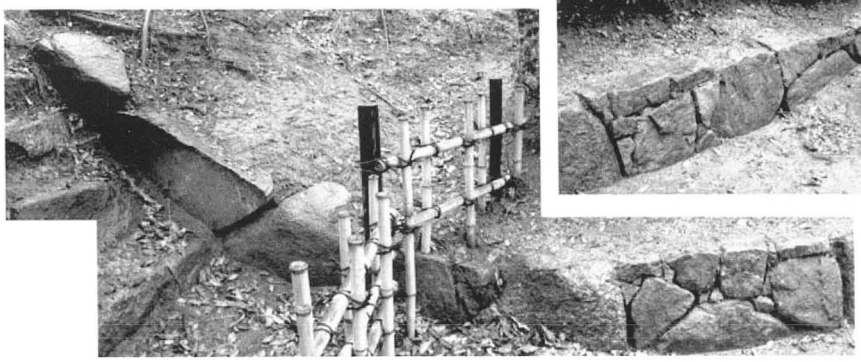
築造時期	生駒期・明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



石材の形状、間詰石の積め方が揃っている





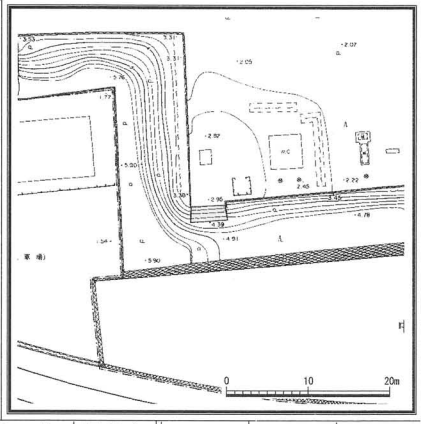
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の内石垣の東面の土留石垣である。 ・高さは中央部で約0.7m、全長は天端で約23.7mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は地盤にすり付けである。 ・石材は方形の他、多角形や丸みのある形状の石材を組み合わせて丁寧に積んでいる。規模は標準的なものとやや大ぶりのものが多く用いられている。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5014	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	雁木				石積工法		
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

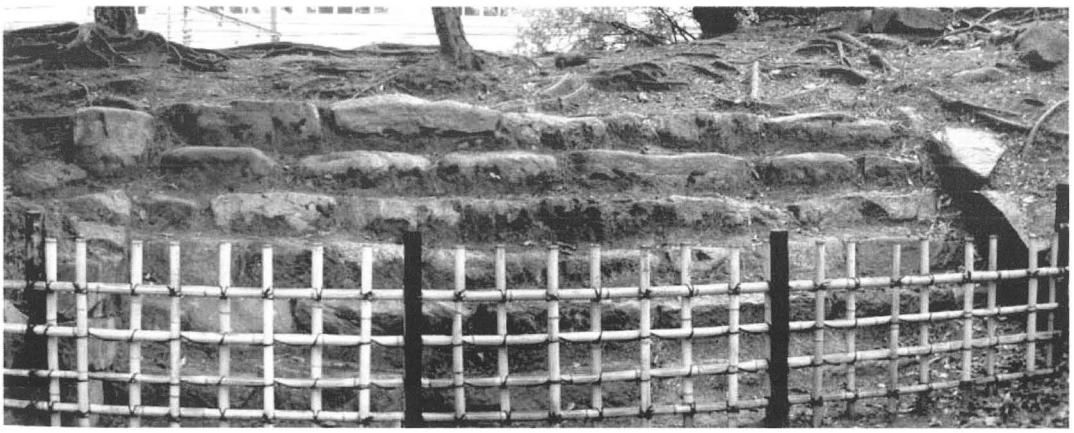


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	-	4.36	-	-	-	-	-	-	-	-

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



踏面幅約30～40cm

※加工度の低い石材が多くみられる

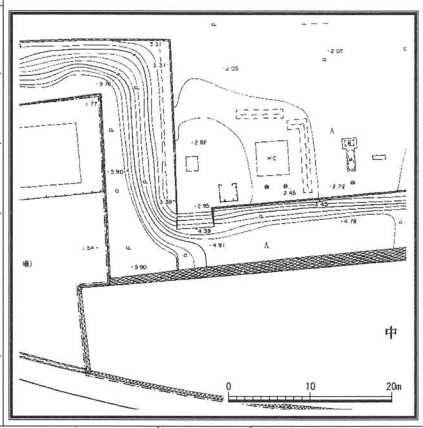
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の多聞櫓台へ上る雁木である。 ・最上段の幅員は約4.4mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた雁木で、扁平に石材を1列に数個並べて雁木を作っている。 ・踏み面は整形されていない。 ・石材は方形の丸みのあるものが多く、規模はやや大ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれておらず、『旧高松御城全図』に描かれていることから、生駒期にはなかったと考えられる。 ・『小神野夜話』によると、新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期の雁木の可能性が考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5015	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	野面石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法	乱積	
方　位	西				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	すりつけ			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.75	－	0.53	－	0	89	－	－	－	－

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

天端揃わず

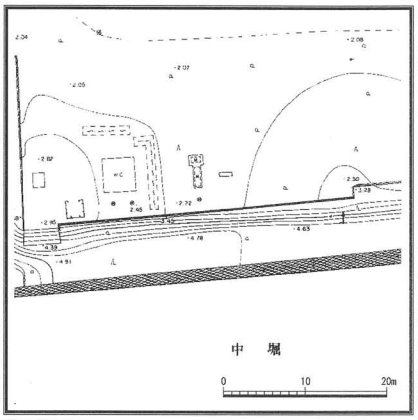
備　考	すり付け、雁木脇	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の内石垣の土塁へ上る雁木の東側側壁である。 ・高さは下段で約0.5mで、全長は天端で約2.8mである。 ・勾配は89度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左端部に3石と他1石が残るだけである。 ・石材は不定形のものが多く、規模は小ぶりなものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれておらず、『旧高松御城全図』に描かれていることから、生駒期にはなかったと考えられる。 ・『小神野夜話』によると、新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期の石垣の可能性が考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5016	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	乱積、布積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

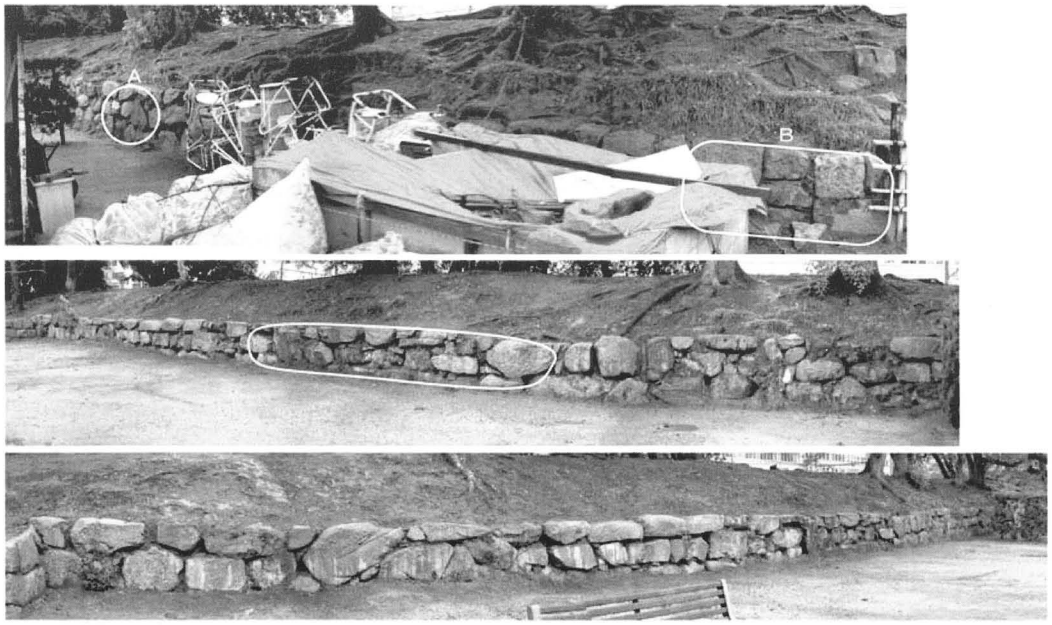


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s123								a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	36.69	36.5	0.82	0.83	0.54	86	85	-2	88	89

築造時期	松平初期・新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．うすいハラミ
B．切石

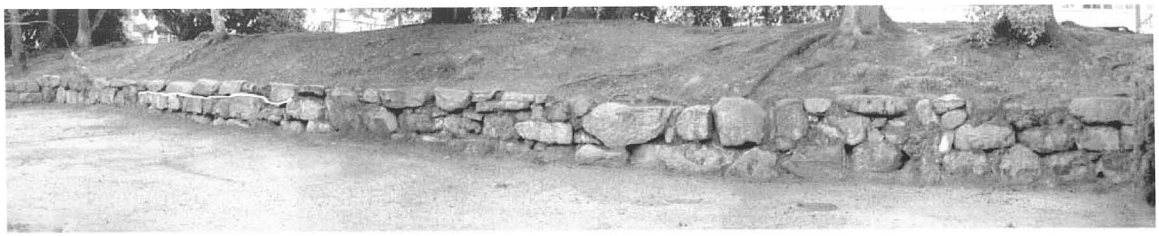
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約0.8m、全長は天端で約36.7mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積であるが、布積も見られる。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形のものが多く見られる。規模はやや大ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・ハラミが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれていないことから、生駒期にはなかったと考えられ、『小神野夜話』によると新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期に築造された可能性が考えられる。 ・『旧高松御城全図』によるとNo.5016～No.5018石垣まで一連の石垣として描かれていることから、明治以降に積み直しがあったと考えられる。

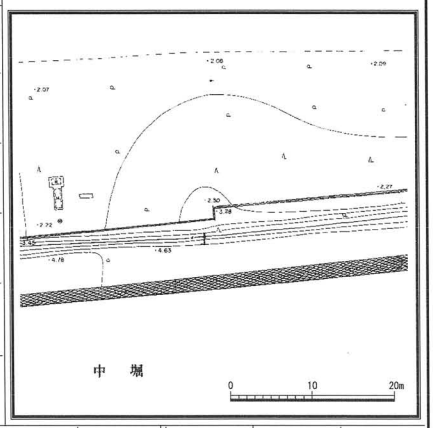
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
中央やや左より7石分の横目地	上方	花崗岩	割石角張る	ほぼ同規模	割石布積	布積
	下方	花崗岩	割石角張る		割石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5017	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法		布積	
方　位	西				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無				刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.22	1.28	0.78	-	0.75	85	88	-	84	86

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

切石布積、後世のもの

備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

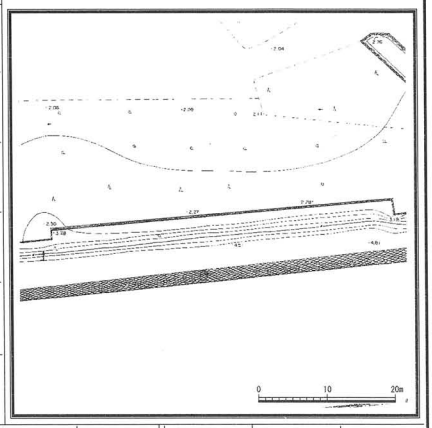
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の西面内石垣である。 ・高さは約0.8m、全長は天端で約1.2mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によるとNo.5016～No.5018石垣まで一連の石垣として描かれていることから、明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面の横目地	全面	花崗岩	方形切石	同規模	切石布積	布積

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5018	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法		谷積	
方　位	北				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s123									a2	b3	C

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		50.03	50.03	0.97	0.85	0.8	83	83	82	86	85

築造時期	松平初期・新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

天端石ズレ４石（左側）
中央石ズレ１石（右側）
右角天端ズレ
※切石の全面谷積。後世のもの。

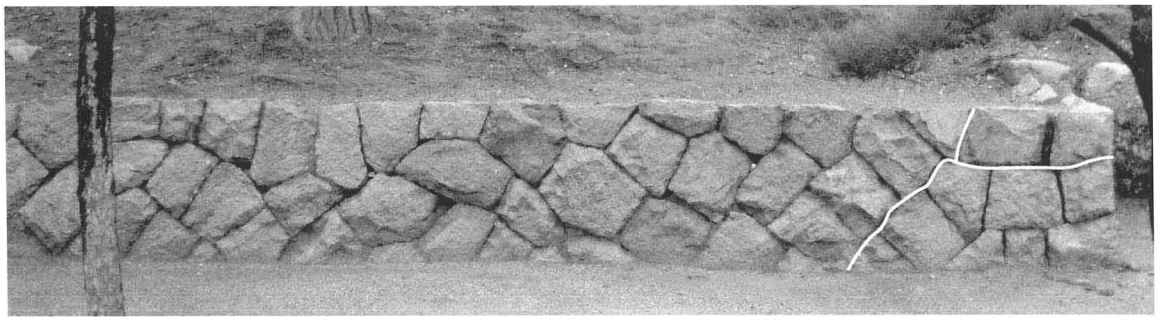
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

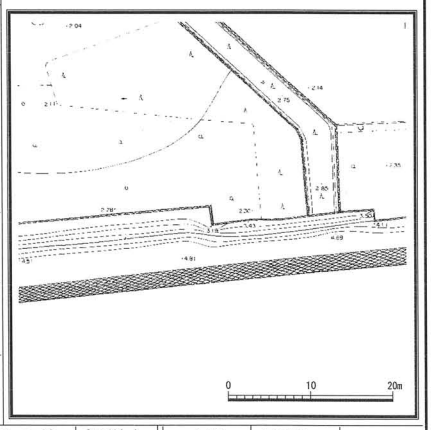
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約0.9m、全長は天端で約50mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・ズレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれていないことから、生駒期にはなかったと考えられ、『小神野夜話』によると新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期に築造された可能性が考えられる。 ・『旧高松御城全図』によるとNo.5016～No.5018石垣まで一連の石垣として描かれていることから、明治以降に積み直しがあったと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角天端から下部に至る目地	左側	花崗岩	多角形切石	ほぼ同規模	切石谷積	異なった石積工法
	右側	花崗岩	多角形切石		切石布積	
右隅角部の横目地	右隅角部	花崗岩	多角形切石	同規模	切石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

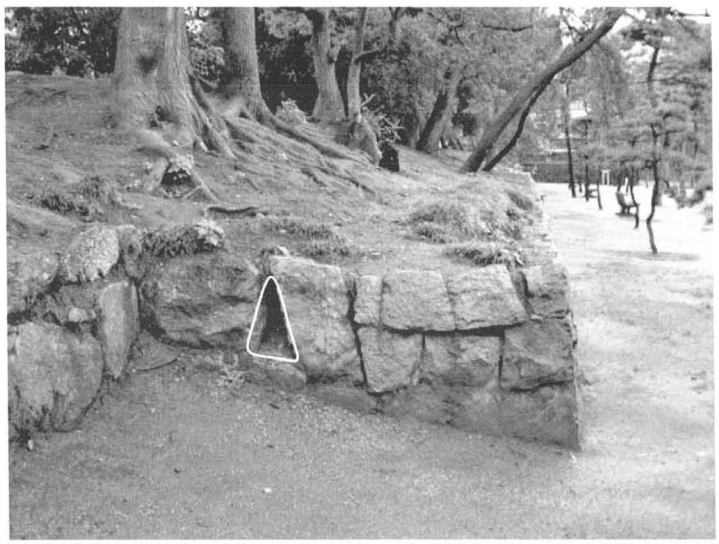
石垣番号	5019	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法		布積	
方　位	東				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無				刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s1			a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.2	2.36	0.48	-	0.94	87	80	82	87	83

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



間詰石のヌケ

備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

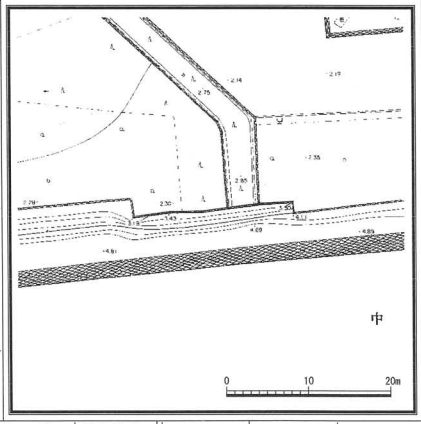
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の東面内石垣である。 ・高さは約0.9m、全長は天端で約2.2mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。左隅角部分1石のみ割石が用いられている。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれていないことから、生駒期にはなかったと考えられ、『小神野夜話』によると新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期に築造された可能性が考えられる。 ・切石部分は、明治以降の積み直しが考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部の横目地	右隅角部	花崗岩	方形切石	同規模	切石布積	布積

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5020	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

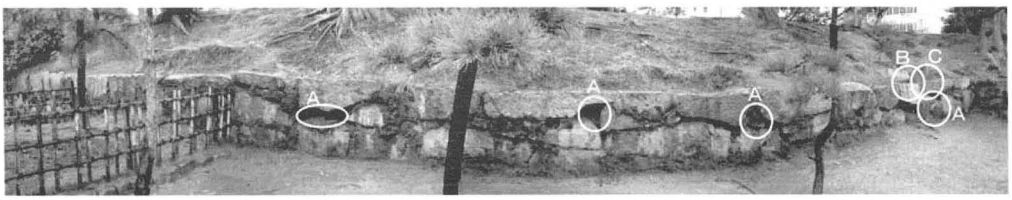


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1	s1						s2			a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	19.75	19.91	1.18	0.96	0.65	85	-1	89	-1	87

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．間詰石のヌケ
B．ズレ
C．欠け
D．縦石使い

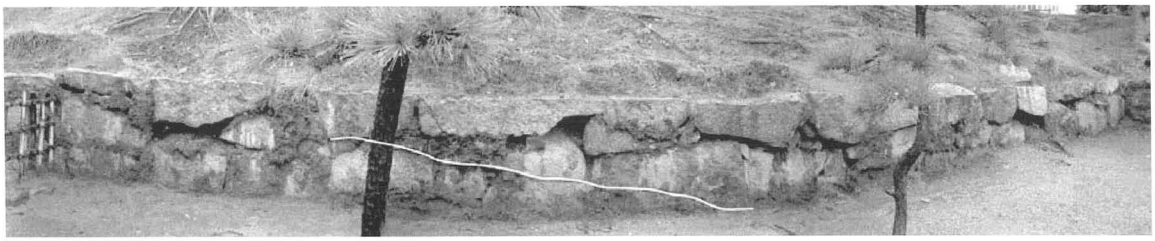
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の北面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.0m、全長は天端で約19.8mである。 ・勾配は89度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材はやや扁平な方形で角張っているものが多く、規模は大ぶりのものが多い。 ・左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが多く見られる。 ・天端石に欠損やズレが見られる。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれていないことから、生駒期にはなかったと考えられ、『小神野夜話』によると新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期に築造された可能性が考えられる。

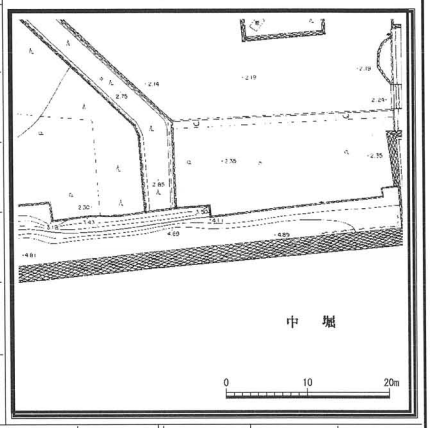
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左中間に中段から右下がりに下部に至る目地	上方	花崗岩	割石角張る	ほぼ同規模	割石布積	布積
	下方	花崗岩	割石角張る		割石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5021	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

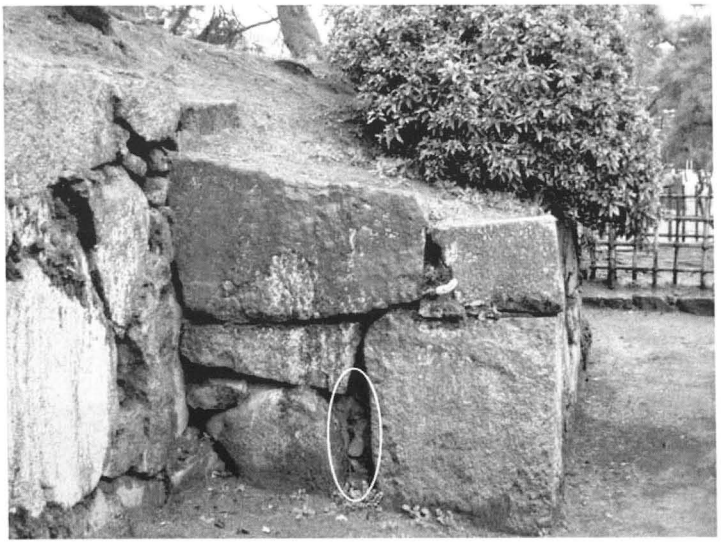


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.5	1.4	1.3	-	1.17	90	85	-	83	85

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



間詰石のヌケ

備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

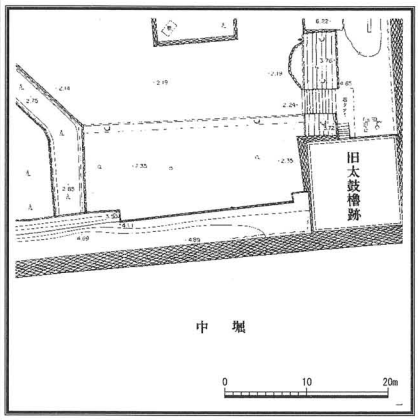
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の東面内石垣である。 ・高さは約1.3m、全長は天端で約1.5mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形や、やや扁平なもので、規模はやや大ぶりなものが多い。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれていないことから、生駒期にはなかったと考えられ、『小神野夜話』によると新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期に築造された可能性が考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5022	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	乱積、谷積(一部)
方　位	北				角石(算木) 左	
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	
	右隅角	入			その他特記	
上部構造物	-				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置

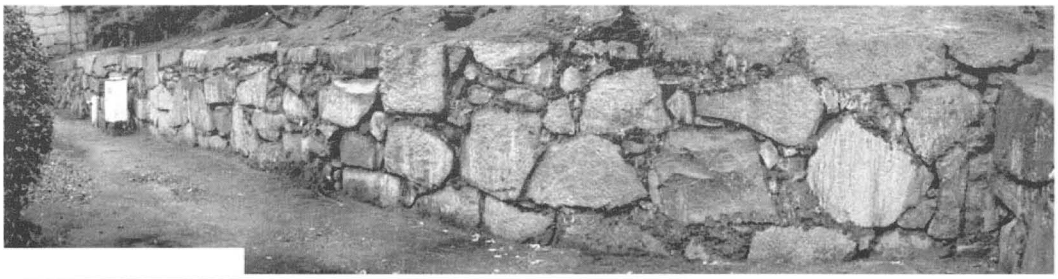


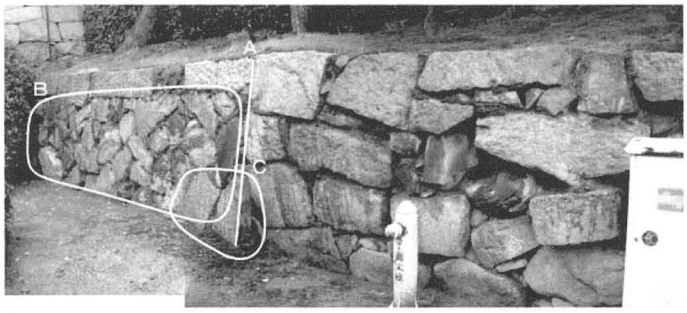
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2									a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	21.2/0.7	21.22	1.28	1.57	1.59/0.15	86	81	86	-1	90

築造時期	松平初期・新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．目地より左側積み直し
B．谷積
C．ズレ出し

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

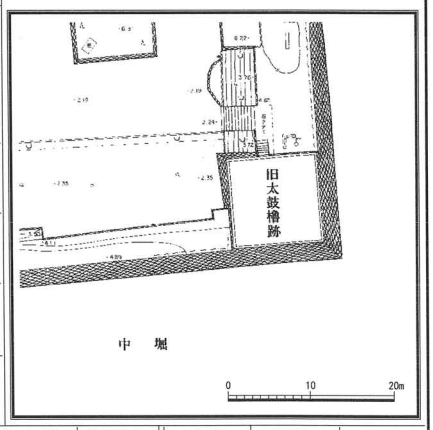
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の北面内石垣である。 ・高さは約1.6m、全長は約21.9mである。 ・勾配は86度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積であるが、左隅角近くに谷積が見られる。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形や、やや扁平なものが見られ、規模はやや大ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中段部にズレが見られる。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』に描かれていないことから、生駒期にはなかったと考えられ、『小神野夜話』によると新郭造築期に桜ノ馬場も改変されていることから、新郭造築期に築造された可能性が考えられる。 ・『旧高松御城全図』によると、左半に雁木が描かれており、左隅角付近の谷積部分は明治以降の積み直しが考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角から左中間に至る笠石下の目地	上方	花崗岩	方形切石	扁平長大	切石布積	笠石の積み上げ
	下方	花崗岩	方形割石	大小混在	割石谷積	
左中間天端から左下がりに下部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形割石	左側石材がやや小ぶり	割石谷積	左側積み直し
	右側	花崗岩	割石角張る		割石乱積	
中央部の天端から右下がりに下部に至る縦目地	左側	花崗岩	割石不定形	ほぼ同規模	割石乱積	右側の積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	割石不定形		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5023	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	布積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	0.9	0.95	1.61	-	1.59	86	86	-	90	86

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	昭和40～42年(全面修理？)『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

見えない（樹木の裏側）

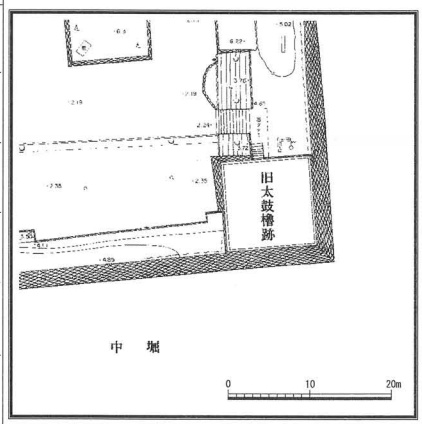
備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の西面内石垣である。 ・高さは約1.6m、全長は天端で約0.9mである。 ・勾配は86度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造されたと考えられる。 ・昭和40～42年の艮櫓移築に際して、太鼓櫓台が拡張されており、本石垣も移動していると考えられる。
目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5024	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	内(多聞塀台)				石積工法	布積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.95	1.53	1.56	-	1.61	82	83	-	86	86

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修		基底部	
修　理	昭和40～42年(全面修理？)『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

全面ノミ跡あり

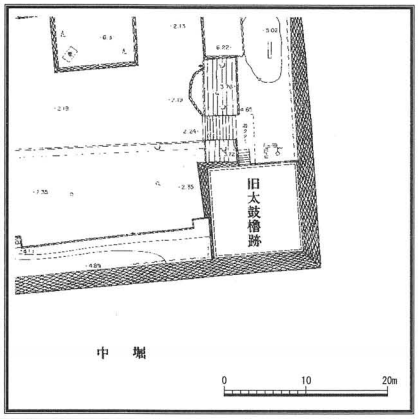
備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の北面内石垣である。 ・高さは約1.6m、全長は天端で約2.0mである。 ・勾配は86度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。全面にノミ仕上げが見られる加工精度の高い石材で積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造されたと考えられる。 ・昭和40～42年の艮櫓移築に際して、太鼓櫓台が拡張されており、本石垣も移動していると考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5025	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法		布積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	太鼓櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

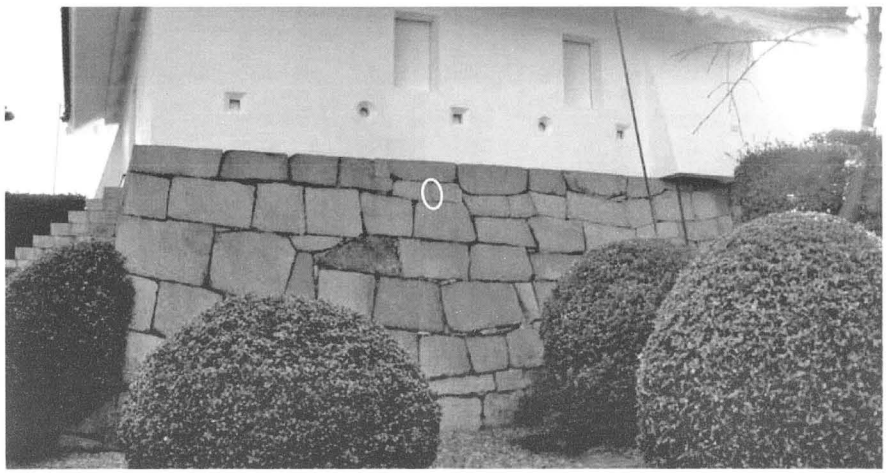


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s1							a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	11.23	6.92/5.05	3.89	3.8/2.19	1.8/0.13	69/82	74	73	74/82	81

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修	基底部　地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和40～42年(全面修理)『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』
発掘調査	『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



ワレ

※昭和40～42年の艮櫓移築に伴うもの

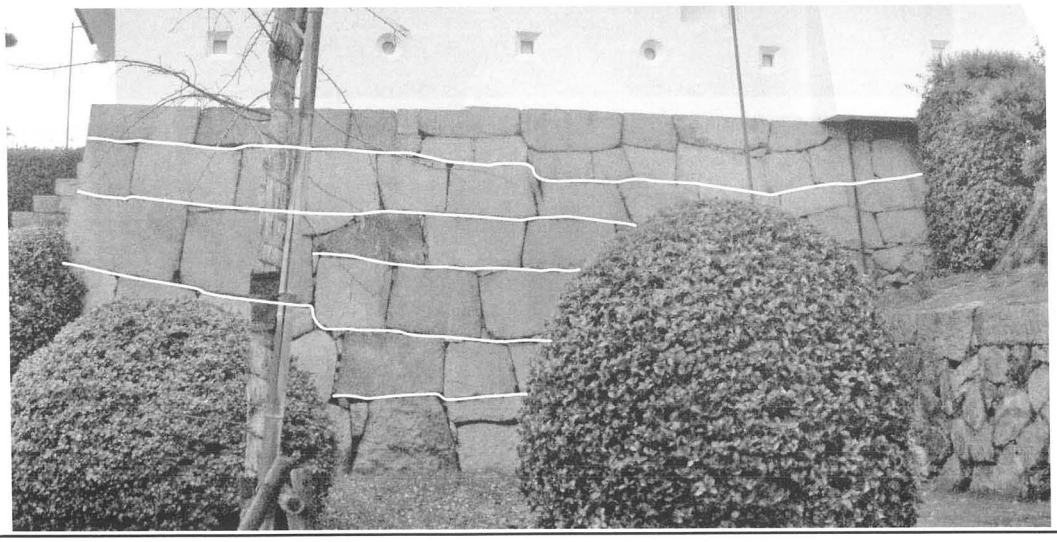
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南東部の旧太鼓櫓台西面内石垣である。 ・高さは中央部で約3.8m、全長は天端で約11.2mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。ノミ仕上げの見られる加工精度の高い石材で積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣中央上部にワレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。 ・昭和42年の艮櫓移築に際して、石垣全体を約1m前面に積み直している。 ・修理に際して根石部分はコンクリートで補強している。

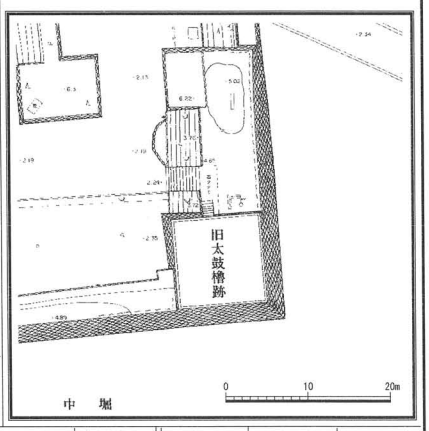
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面の横目地	全面	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5026	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石、割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	布積	
方　位	北				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	太鼓櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

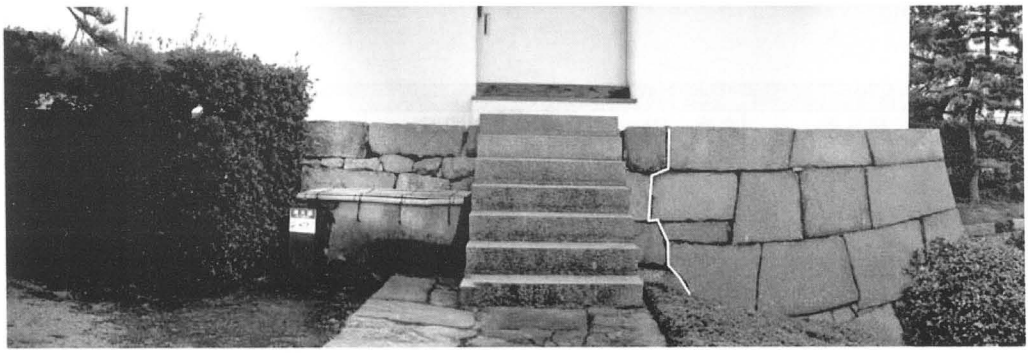


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	3.91	-	2.66	-	4.02	88	82	83	-	69
	左	5.62	5.75	1.45	1.49	1.37	82	81	-	86	80

築造時期	明治以降	改修		基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和40～42年(全面修理)『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査	『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



ラインより右側櫓移築（昭和40～42年）に伴う積み直し箇所

備　考	右端勾配・中央勾配計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南東部の旧太鼓櫓台北面内石垣である。中央の雁木で左右に区分される。 ・高さは左側で約1.5m、右側で約4.0mである。全長は天端で約9.5mである。 ・勾配は左側で86度、右側で83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は右半は花崗岩の切石を用いた布積であるが、左半は割石を用いた布積である。ノミ仕上げが見られる加工精度の高い石材で積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものが多いが、左半ではやや小ぶりなものも多い。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。 ・昭和42年の艮櫓移築に際して、石垣全体を約1m前面に積み直している。 ・修理に際して根石部分はコンクリートで補強している。

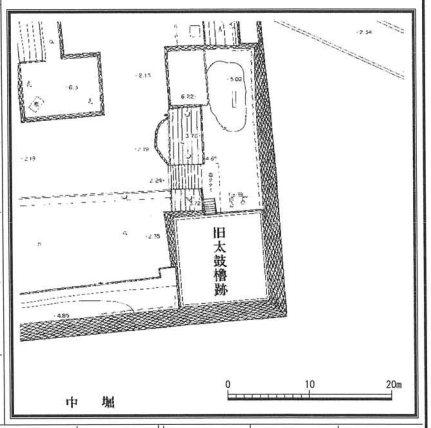
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面の横目地	全面	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	布積

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5027	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石
石垣部位	石段（後世のもの）				石積工法		
方　位	北				角石（算木）	左	
角の形状	左隅角	出				右	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

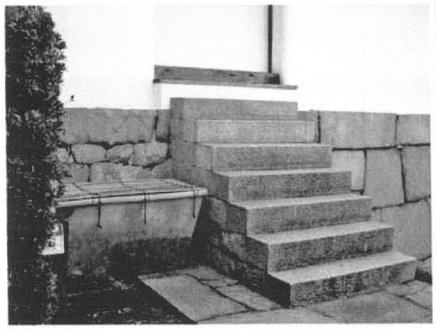


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	-	1.41	-	1.47	-	-	-	-	-	-

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	昭和40～42年（全面新設）『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



棒状の切石を積み上げる。側面は布積。
櫓移築に伴うもの。

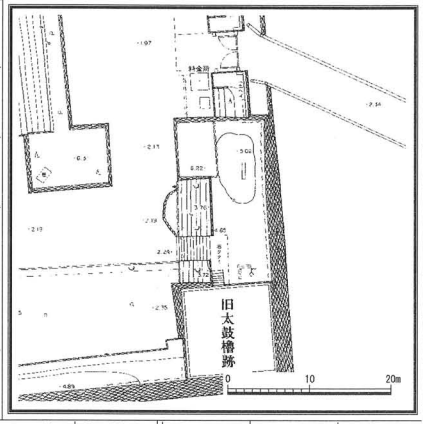
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南東部の旧太鼓櫓台上に移築された艮櫓へ入る石段である。 ・段数は7段で、幅員は約1.4mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段で、側面は布積である。 ・石材は直方体で、規格的である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・昭和40～42年の艮櫓移築に際して、新設された石段である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5028	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石、割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法	布積、乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

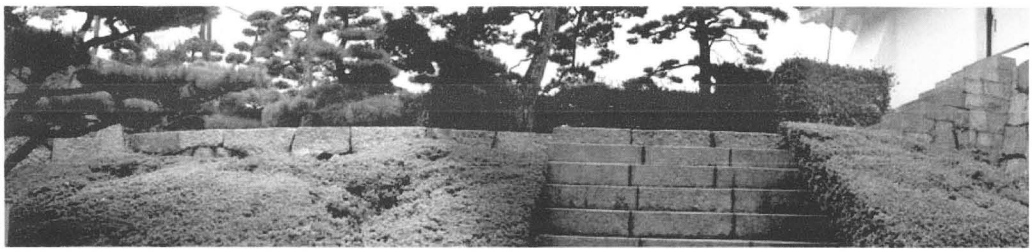


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	左	7.38	-	-	1.14	0.36	89	85	78	78	-

築造時期	新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理	昭和40～42年(全面修理)『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



植栽で見えないが、２～３段の石垣

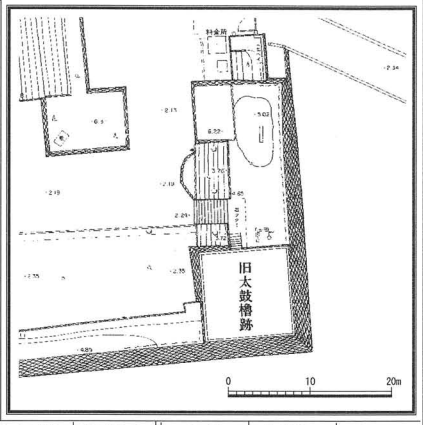
備　考	計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南東部の多聞櫓台西面内石垣であり、石段によって左右に区分される。 ・左側は高さ約1.1m、全長は天端で約7.4mであるが、右側は計測不可能であった。 ・勾配は78度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積であるが、天端のみ花崗岩の切石を用いた布積である。両隅角とも入隅である。ノミ仕上げの見られる加工精度の高い石材で積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から、新郭築造期に築造されたと考えられる。 ・昭和40～42年の艮櫓移築に際して、右端が改変されている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5029	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	石段(後世のもの)				石積工法			
方　位	西				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無				刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	-	3.02	-	0.35	-	-	-	-	-	-

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	昭和40～42年(全面新設)『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

長方形柱状の石を３石づつ積む。後世のものと思われる。

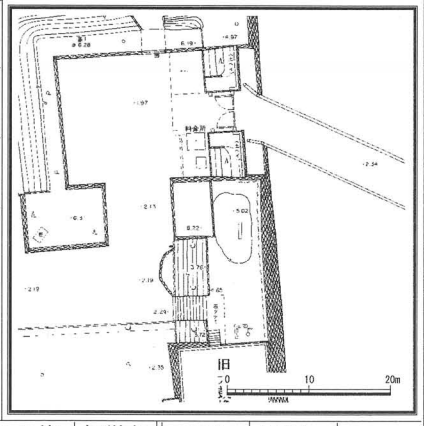
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南東部の櫓台へ取り付く石段である。 ・段数は11段で、幅員約3.0mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。ノミ仕上げの見られる加工精度の高い石材で積み上げられている。 ・石材は直方体で、規格的である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・昭和40～42年の艮櫓移築に際して、新設された石段である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5030	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		布積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	太鼓門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

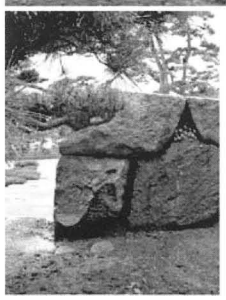


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		s3									a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.68	6.85	1.24	0.89	1.25	89	-1	88	89	86

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



少々ズレ出し

※正面に比べると石材の加工度低い

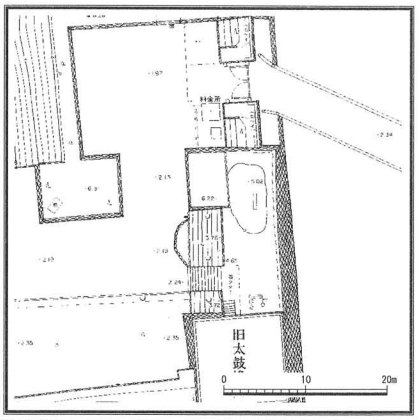
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門台東面石垣である。 ・高さは中央部で約0.9m、全長は天端で約6.7mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石と切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石垣下部で小さなズレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5031	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	太鼓門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.52	-	4.04	1.8	1.27	80	87	87	85	89

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

少々隙間（数cm）

※全石ノミ跡あり

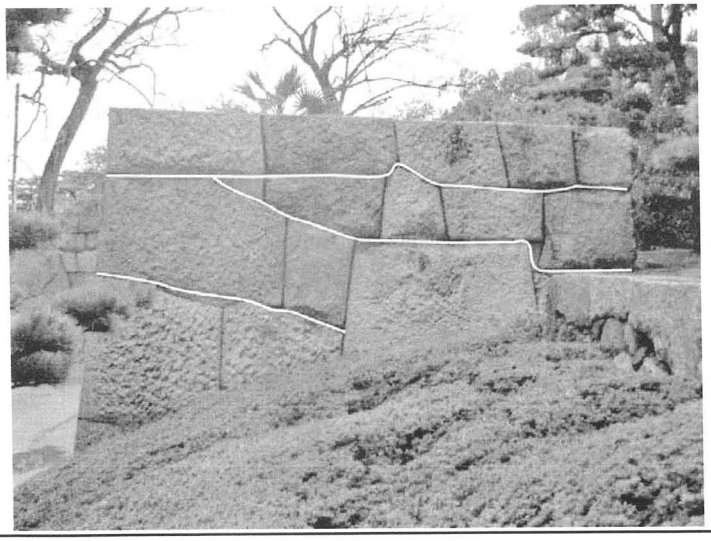
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門東側台の南面石垣である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約4.5mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材全面にノミ仕上げが見られる加工精度の高い切石を幾何学模様になるようにモザイク状に組み込み、合端が噛み合った完成度の高い石垣である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は多角形のものが多く、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

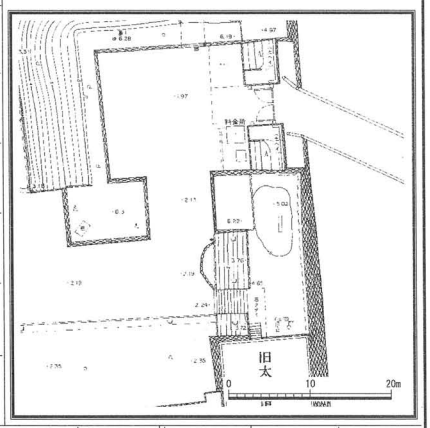
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	石垣面に幾何学模様を表す



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5032	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石
石垣部位	門				石積工法		乱積
方　位	西				角石（算木）	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	太鼓門				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

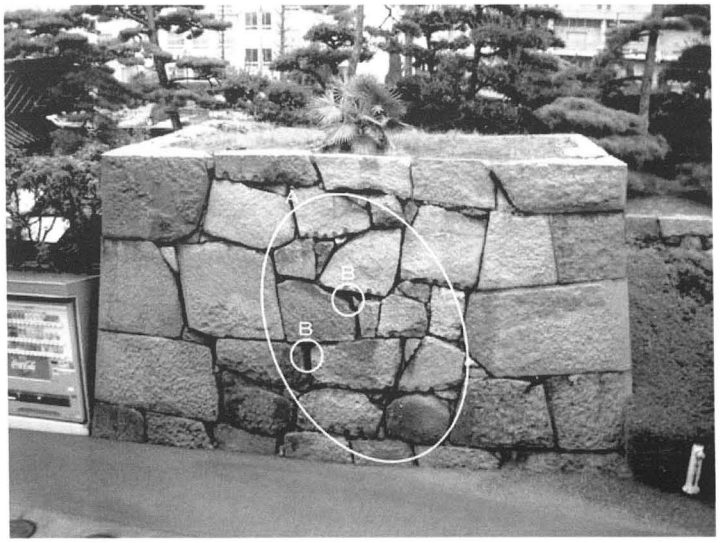


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s23			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.78	7.68	4.04	4.09	4.02	81	84	85	83	80

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．面に出入りあり
B．間詰石のヌケが見られる
※のみ打ち仕上げ
　矢穴の石材８石あり

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門東側台の西面石垣である。 ・高さは中央部で約4.1m、全長は天端で約6.8mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。石材の表面にノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中央部に間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

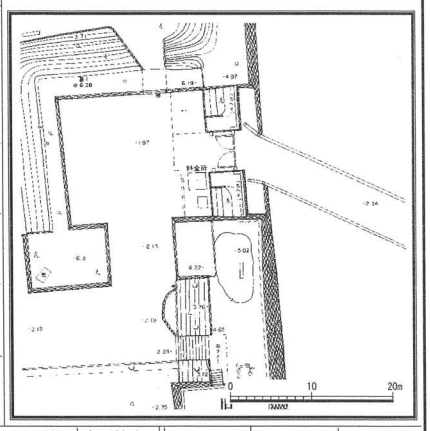
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
両隅角に至る谷形の目地	谷形中側	花崗岩	方形割石	中側石材が小ぶり	割石乱積	異なる石積工法
	谷形外側	花崗岩	方形切石		切石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5033	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石
石垣部位	門				石積工法		乱積
方　位	北				角石（算木）	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	多聞櫓、太鼓門				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2								有	a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	9.29	5.62	1.19	-	3.99	-	-	-	-	-
	左	1.9	2.67	3.7	-	-	72	83	82	83	81

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．モルタル目地
B．後ろへ少し倒れる
　　その下の石少し前へズレる
※全面ノミ

備　考	短い石垣のため中央高・右端高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

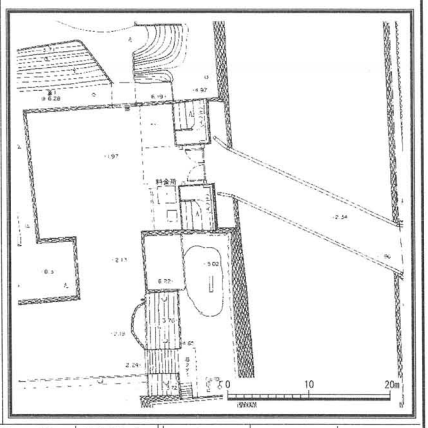
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門東側台の北面石垣である。 ・高さは門台部分で約4.0m、多聞櫓台部分で約1.2mである。全長は天端で約11.2mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。石材の裏面には全面にノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣中央部中段に石材のズレが見られる。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角全面の横目地	左隅角部	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	布積

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5034	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	旭門、塀				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

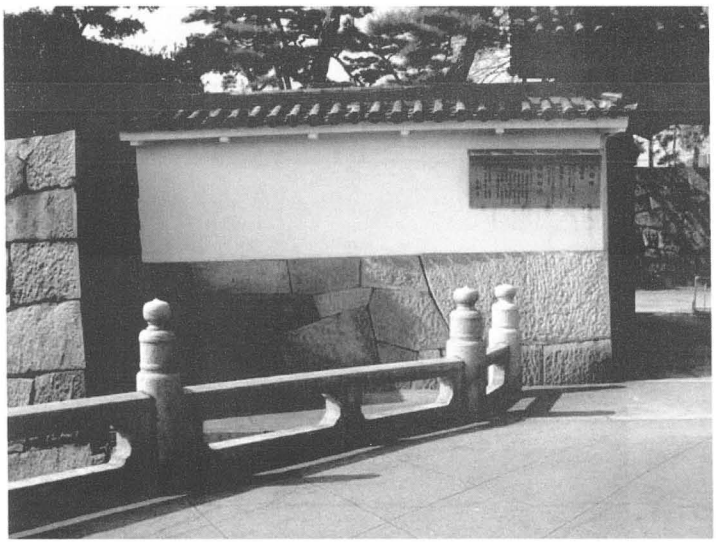


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.85	5.5	1.61	1.62	1.59	72	86	85	90	88

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



モザイク状の石垣全面にノミ跡。

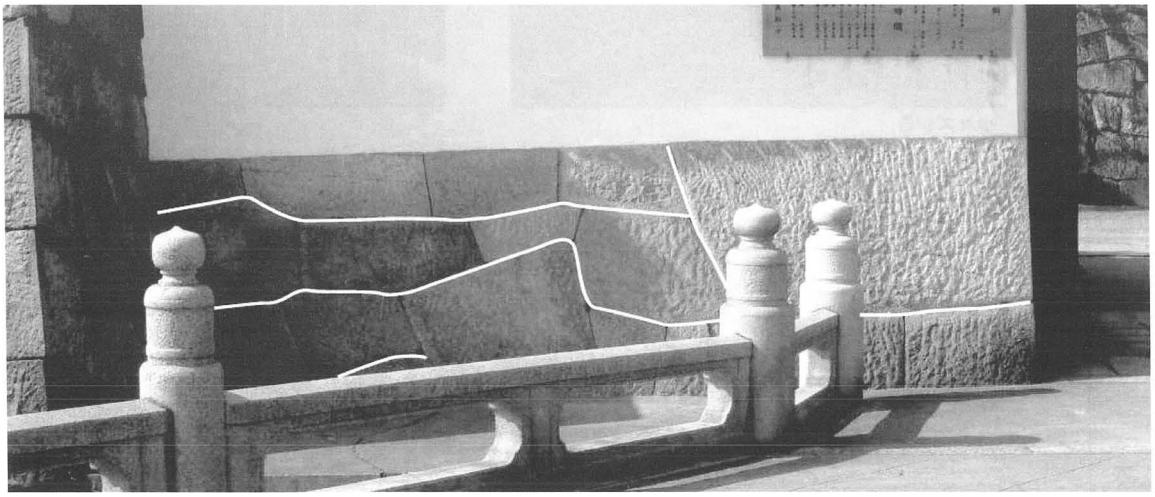
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

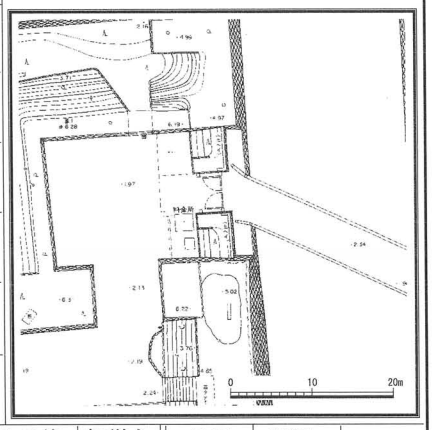
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の旭門南側台の東面石垣である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約5.9mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	石垣面に幾何学模様を表す



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5035	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	北				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	旭門、塀				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			○	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		s1									a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.13	4.2	1.58	1.55	1.54	88	88	85	88	－

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

少々ズレる
全面ノミ仕上げ

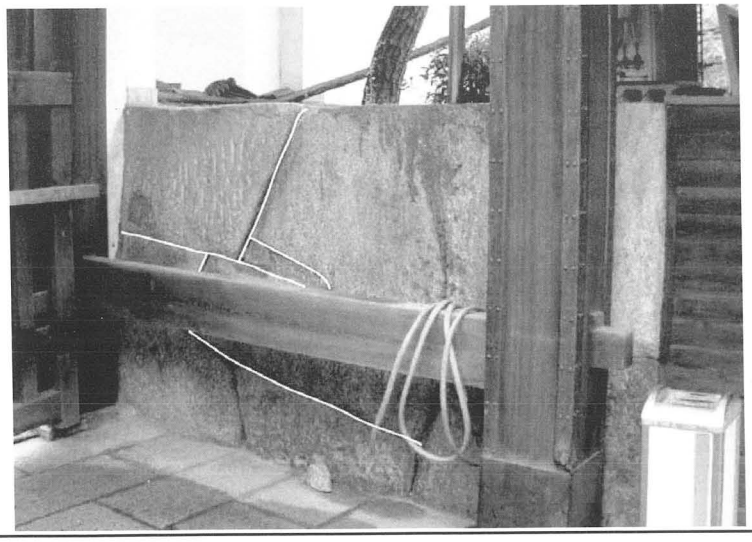
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

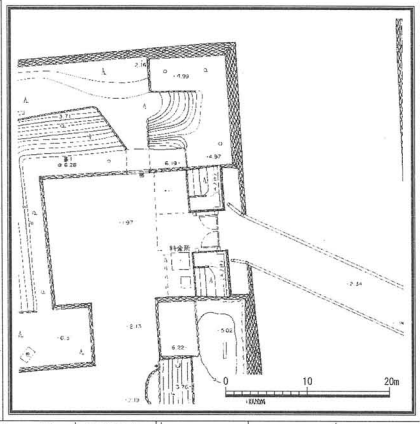
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の旭門南側台の北面石垣である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約4.1mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角1石目に〇が見られるが、刻印かどうかは不明である。城内の他の刻印と比べ加工が浅く大きい。
破損状況	・石垣上部にズレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	石垣面に幾何学模様を表す



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5036	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	南				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	旭門、塀				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

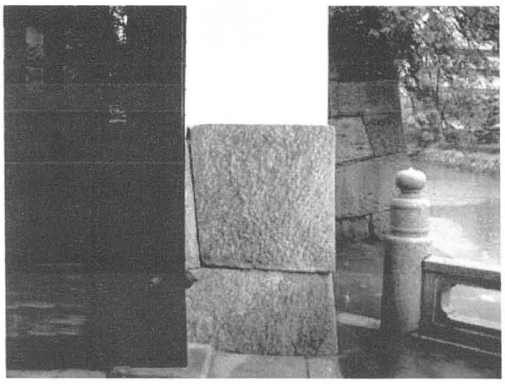
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.04	4.15	1.52	1.58	1.55	88	90	86	87	86

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

全面ノミ仕上げ



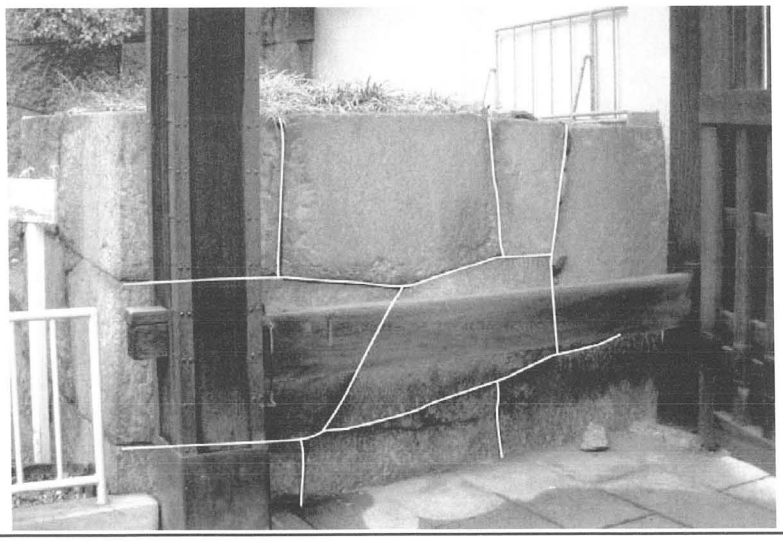
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の旭門北側台の南面石垣である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は約4.1mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

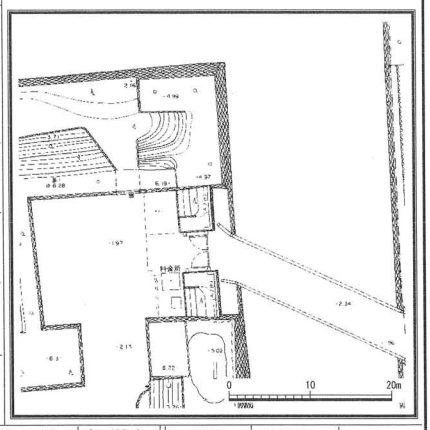
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	石垣面に幾何学模様を表す



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5037	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石
石垣部位	門				石積工法		乱積
方　位	東				角石（算木）	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	旭門、塀				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.48	5.32	1.56	1.59	1.64	86	89	89	90	83

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

モザイク状の石垣全面にノミ跡。

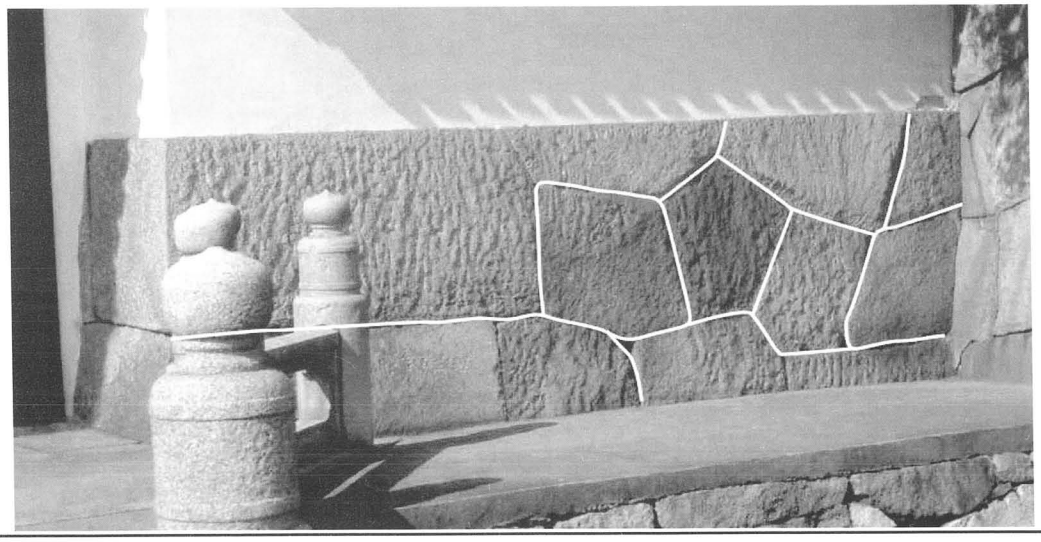
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の旭門北側台の東面石垣である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約5.5mである。 ・勾配は89度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

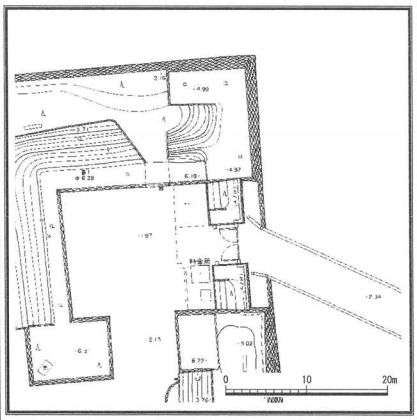
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	石垣面に亀甲等幾何学模様を表す



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5038	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		布積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	旭門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.43/1.92	1.99	0.22/1.52	-	1.46	88	90	88	87	88

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

全面ノミ仕上げ

備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

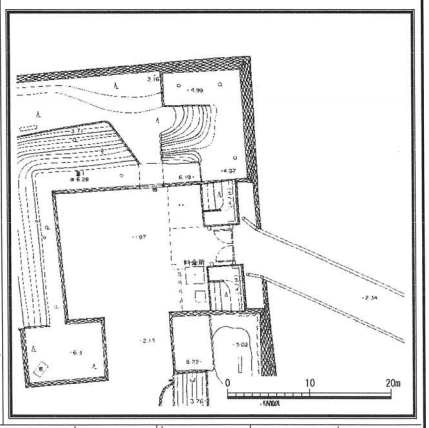
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の旭門北側台の西面石垣である。 ・高さは約1.5m、全長は約1.9mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。石材の表面には全面にノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模はやや大ぶりなものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面の横目地	全面	花崗岩	方形切石	同規模	切石布積	布積

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5039	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	布積	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	太鼓御門				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.15	-	0.34	-	1.52	-	87	88	89	88

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

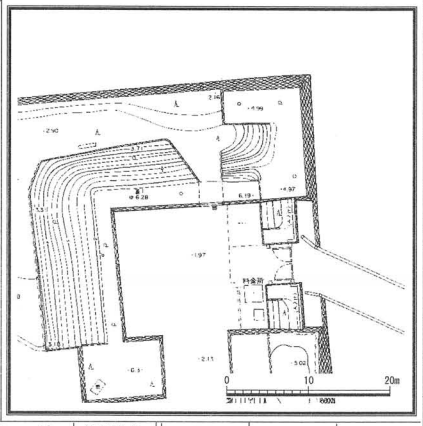
全面ノミ仕上げ。正面（右）に比べるとやや雑な仕上げ。

備　考	短い石垣のため中央高省略、すり付け	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の旭門北側台の北面石垣である。 ・高さは右端で約1.5m、全長は天端で約2.2mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は地盤にすり付けである。石材の表面には全面にノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模はやや大ぶりなものでほぼ揃っている。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

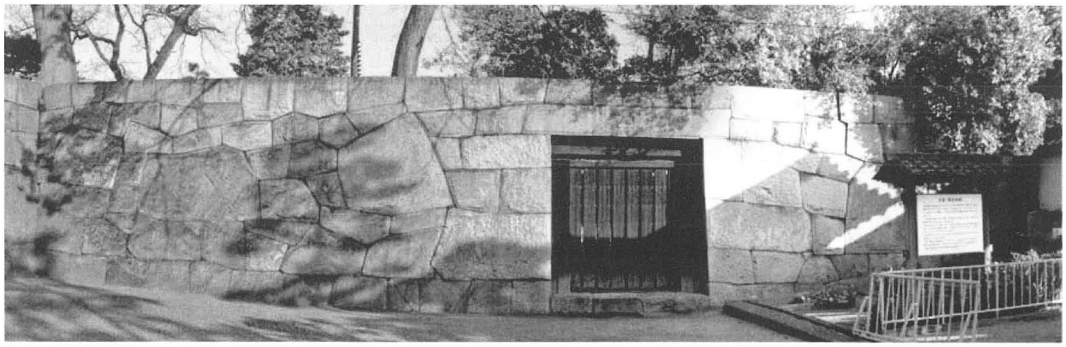
石垣番号	5040	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	桝形				石積工法		乱積	
方　位	南				角石（算木）	左		
角の形状	左隅角	入				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	塀、埋門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

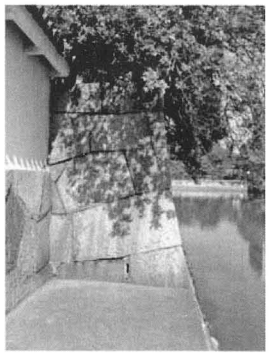
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	1.77	2.22	2.89	-	3.57	-	-	-	81	76
	左	21.99	17.83	4.37	4.42	4.16	80	83	85	-	-

築造時期	新郭造築期	改修	基底部
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



ノミ跡多い。モザイク状の石垣。



備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

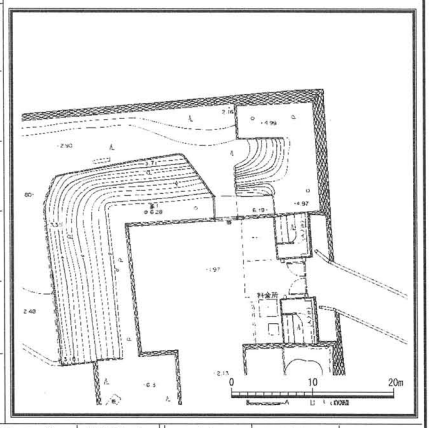
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の桝形南面石垣である。中央やや右寄りにトンネル状の開口部を持つ。 ・高さは中央部で約4.4m、全長は天端で約23.8mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。両隅角とも入隅である。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
開口部を除く石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	大石の点在等形式的模様を表す

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5041	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		布積	
方　位	東				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	埋門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

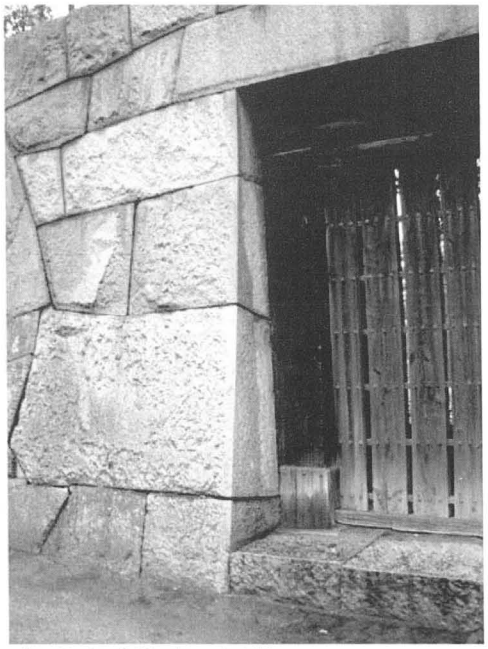


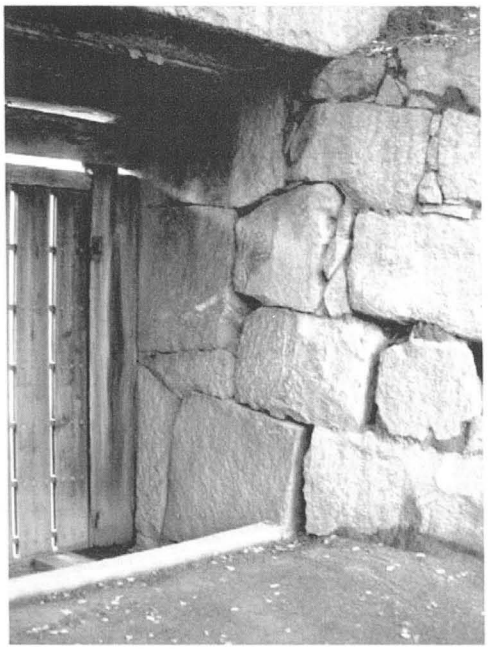
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.34	2.36	3.03	-	2.46	86	90	89	88	90

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





表に比べて裏側の加工度は低い

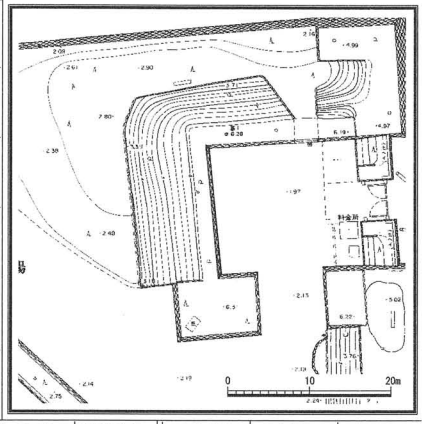
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の桝形南面石垣の開口部の東面石垣である。 ・高さは左端で約3.0m、全長は天端で約2.3mである。 ・勾配は89度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。左隅角は切石、右隅角は割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は完成度の高い算木積であるが、右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5042	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	桝形				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

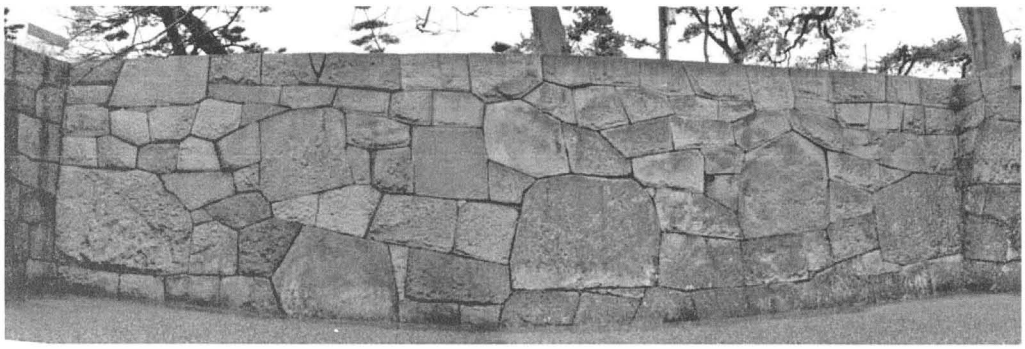


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	16.49	15.62	4.35	4.33	4.42	81	84	83	87	80

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



モザイク状の石垣。全面にノミ跡。

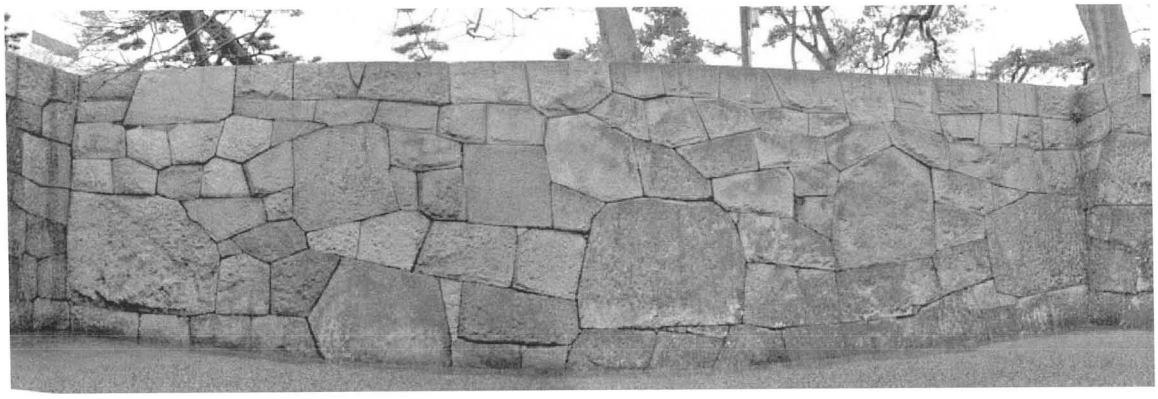
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の桝形東面石垣である。旭門から入って正面の石垣である。 ・高さは中央部で約4.3m、全長は天端で約16.5mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。両隅角とも入隅である。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

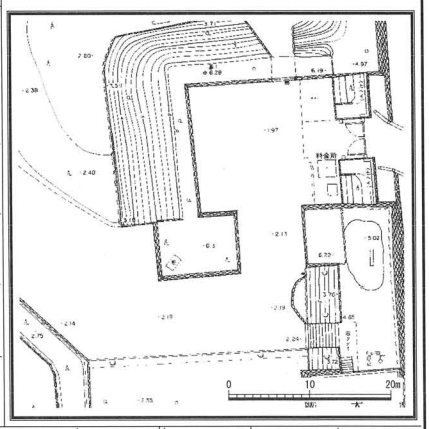
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	大石の点在等形式的模様を表す



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5043	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石
石垣部位	門				石積工法		布積
方　位	北				角石（算木）	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	太鼓門				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.52	4.53	4.3	4.31	4.32	79	82	83	83	81

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

大石材使用
ノミ跡あり。モザイク状の石垣。

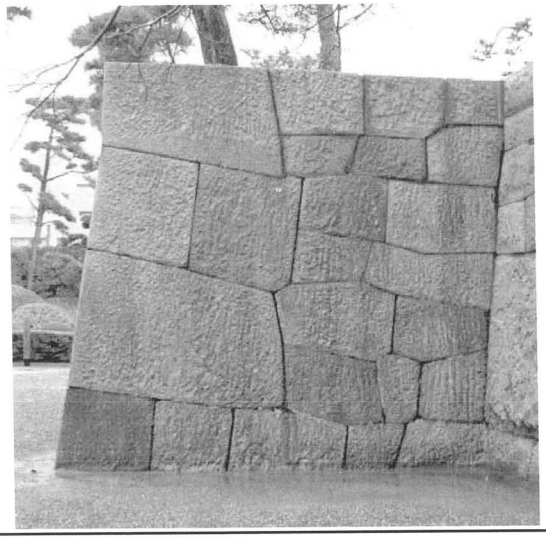
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門西側台の北面石垣である。 ・高さは中央部で約4.3m、全長は天端で約4.5mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

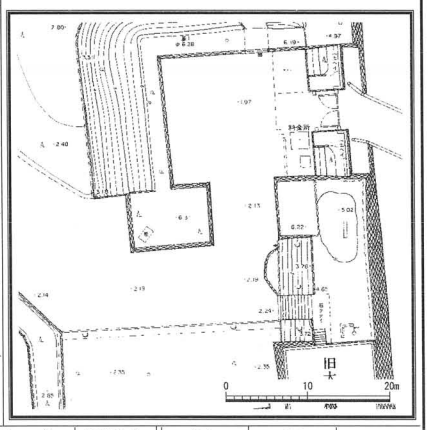
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5044	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石
石垣部位	門				石積工法		乱積
方　位	東				角石（算木）	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	太鼓門				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

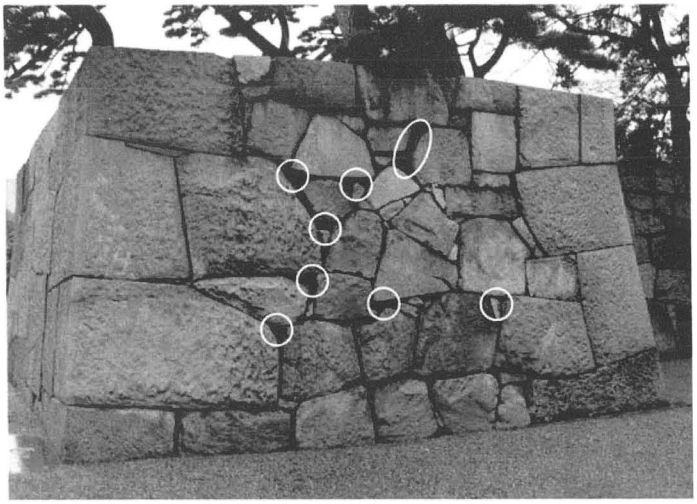


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
									s2	r123		a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.82	7.73	4.05	4.2	4.25	81	84	85	83	79

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



間詰石のヌケ

※中央部焼損あり

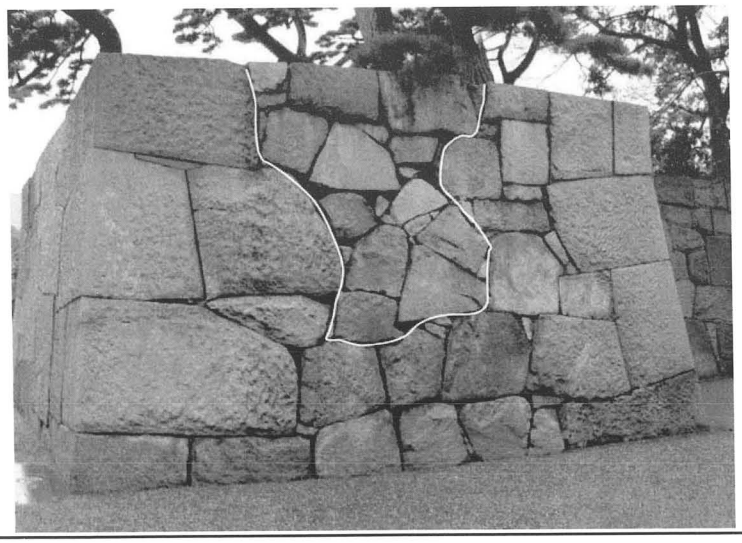
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門西側台の東面石垣である。 ・高さは中央部で約4.2m、全長は天端で約6.8mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。石材の表面にノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中央部に凸凹が見られ、戦災による影響を受けていることも考えられる。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況

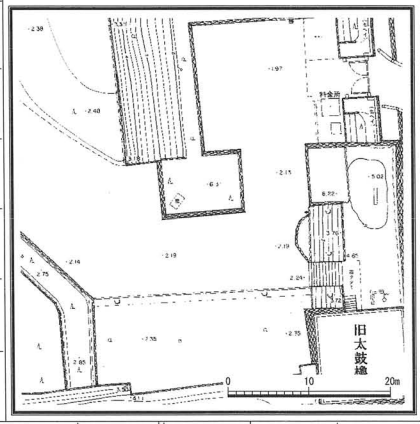
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
両隅角に至る谷形の目地	谷形中側	花崗岩	方形割石	中側石材が小ぶり	割石乱積	異なる工法による築造時のもの
	谷形外側	花崗岩	方形切石		切石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5045	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		切石
石垣部位	門				石積工法		乱積
方　位	南				角石（算木）	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	太鼓門				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

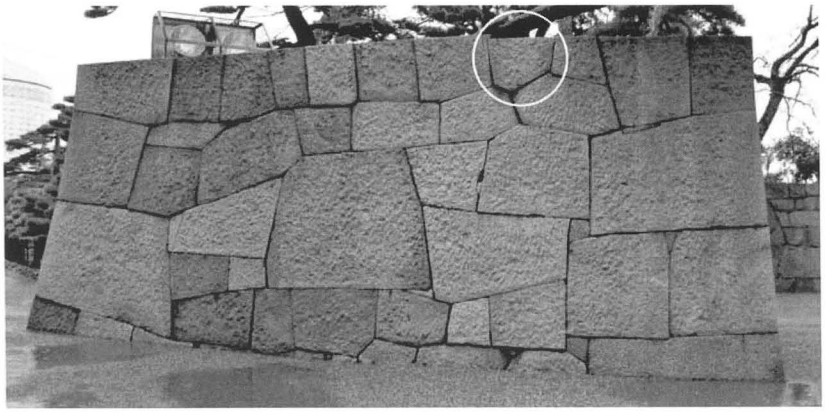


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s1									a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	9.49	10.29	4.09	4	4.06	78	81	85	84	81

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



わずかにズレ
※全面ノミ打仕上げ、モザイク状の石垣

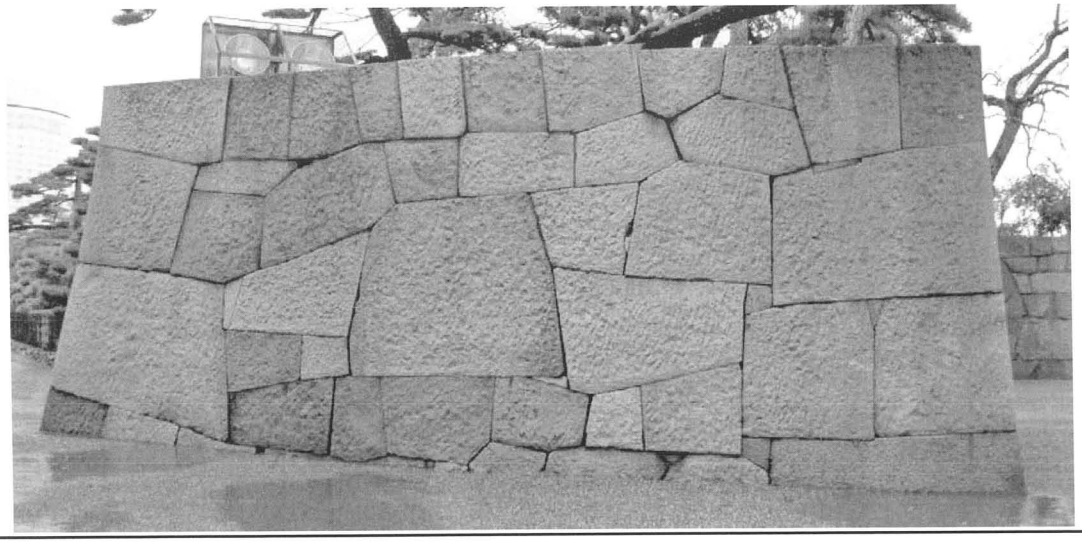
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門西側台の南面石垣である。 ・高さは中央部で約4.0m、全長は天端で約9.5mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。両隅角とも切石によって積み上げられている。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端石にズレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

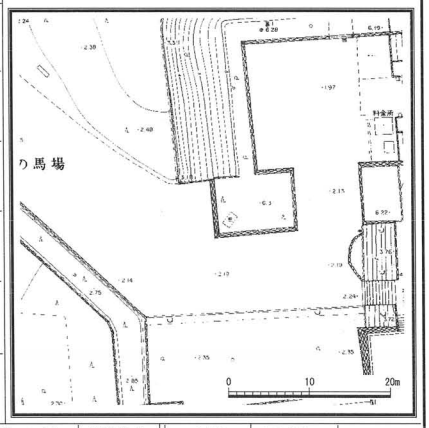
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	大石の配置天端の定形等形式的模様



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5046	地区	桜の馬場	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	西				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	太鼓門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

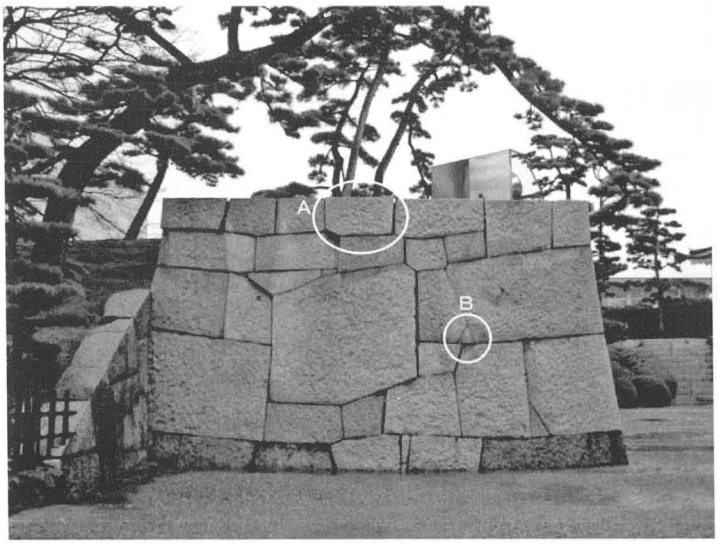


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		s14		s2							a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.86	7.33	4.18	4.19	4.12	84	83	83	82	78

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．前へズレ出し
B．ワレ
※全面ノミ跡、モザイク状の石垣

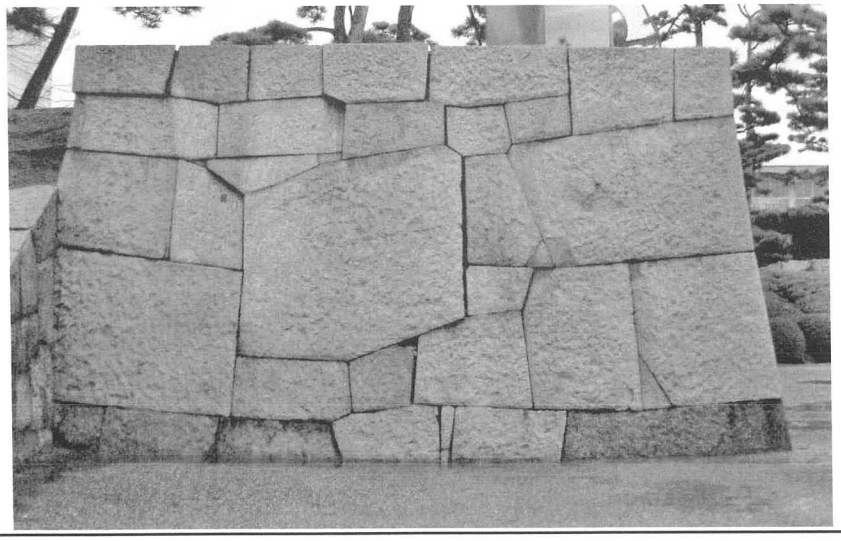
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門西側台の西面石垣である。 ・高さは中央部で約4.2m、全長は天端で約6.9mである。 ・勾配は83度である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。石材の表面にノミ仕上げが見られ加工精度は高い。目地を生かして意匠的効果を出しており、様々な形状の切石を使用し、亀甲積状に合端を噛み合わせて、丁寧に積む完成度の高い石垣である。両隅角とも切石によって積み上げられている。 ・石材は多角形で、規模は大小混在する。 ・右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端石材にズレがみられるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・新郭築造当時のものと考えられる。

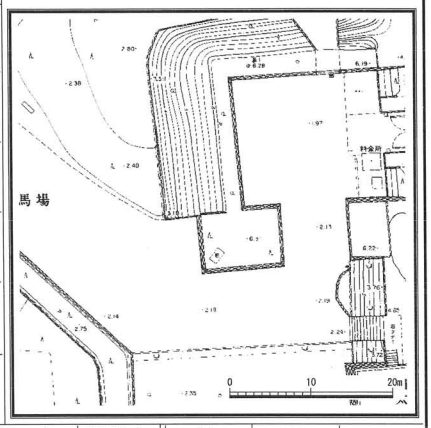
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に意匠性のある目地	全面	花崗岩	多角形切石	大小混在	切石乱積	大石配置、天端の定形等形式的模様



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5047	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	布積	
方　位	北				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	太鼓門				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.61	-	0	-	1.48	-	81	87	83	84

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

全面ノミ跡

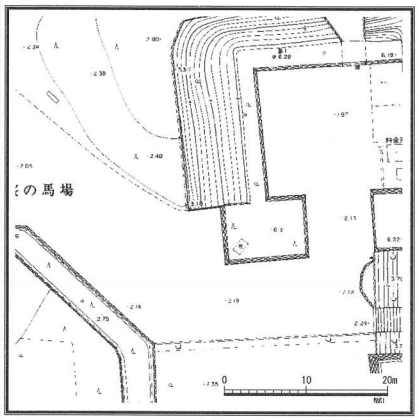
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の太鼓門西側台の北面石垣である。 ・高さは右端で約1.5m、全長は天端で約4.6mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角はすり付けである。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5048	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	-	4	0.43	1.75	2.66	-	82	88	88	84

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	地山(現在はコンクリート)
修　理	昭和48年度(全面修理) 『史跡高松城跡保存修理報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

全面ノミ跡

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

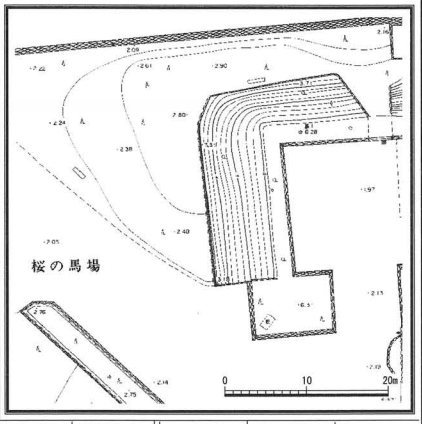
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の南面内石垣である。 ・高さは右端で約2.7m、全長は天端で約4.0mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた乱積である。右隅角は入隅で、左隅角は地盤にすり付く。石材の表面にはノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から、新郭造築期に築造されたと考えられる。 ・昭和48年度に全面解体修理されている。 ・修理に際して根石部分はコンクリートにより補強されている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5049	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石
石垣部位	その他				石積工法	乱積
方　位	西				角石（算木） 左	算木にならない
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない
	右隅角	出			その他特記	
上部構造物	－				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置

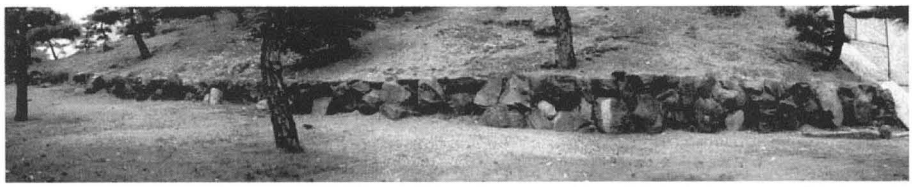


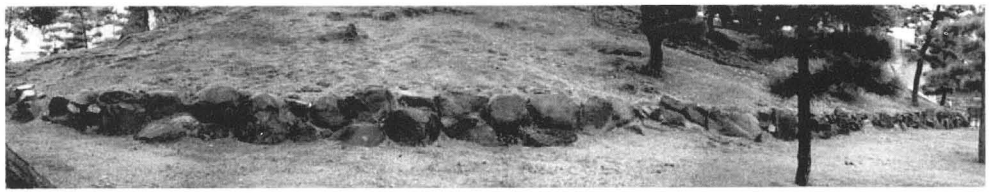
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2									a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	19.51	19.62	0.52	0.44	0.33	－	88	83	83	83

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





全面的にズレ

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

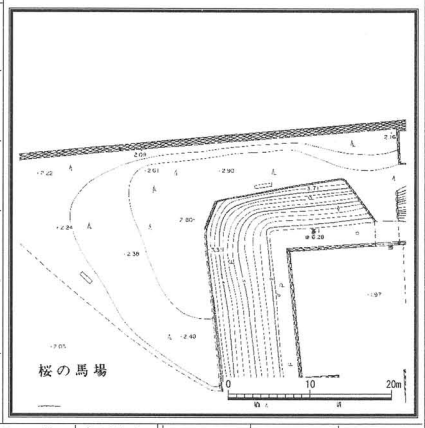
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の桝形背面の西面土留石垣である。 ・高さは中央部で約0.4m、全長は天端で約19.5mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。全体的に石の向きも統一性がなく、やや乱雑な積み方である。 ・石材は不定形で、規模も大小混在する。 ・両隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のズレが多く見られる。
石垣の変遷	・絵図には描かれていないことから、明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5050	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	その他				石積工法		乱積
方　位	西				角石(算木)	左	算木にならない
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		t1	s23t									a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.09	3.09	0.33	0.28	0.76	80	80	-	81	-

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

マツの木により欠損

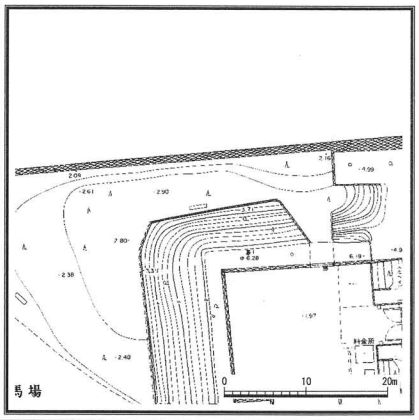
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の桝形背面の北西面土留石垣である。 ・高さは中央部で約0.3m、全長は天端で約3.1mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。全体的に石の向きも統一性がなく、やや乱雑な積み方である。 ・石材は不定形で、規模も大小混在する。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のズレが多く、また、松の木による欠損も見られる。
石垣の変遷	・絵図には描かれていないことから、明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5051	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

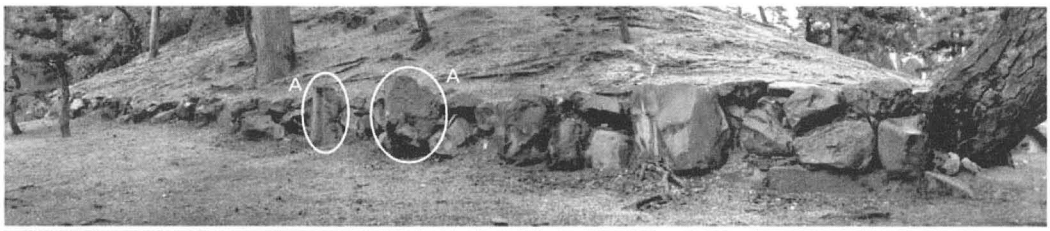


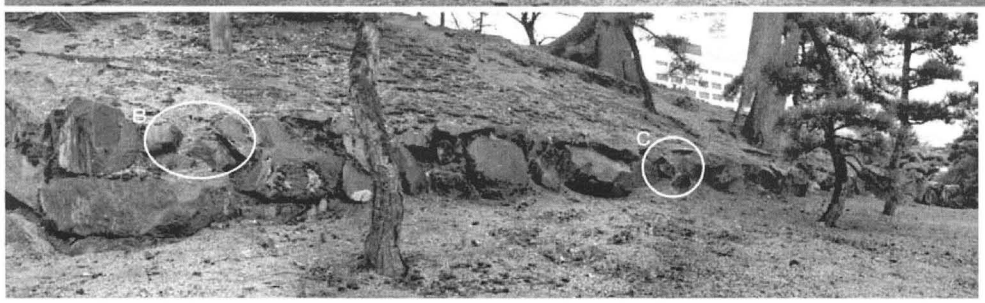
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1	n1									a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	15.58	15.68	0.76	0.43	0.83	82	69	78	90	80

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．縦使い
B．ズレ
C．欠け

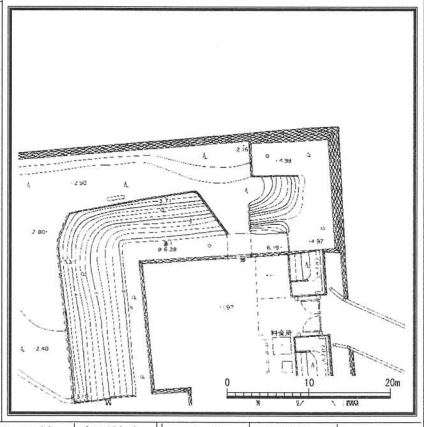
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の桝形背面の北面土留石垣である。 ・高さは中央部で約0.4m、全長は天端で約15.6mである。 ・勾配は78度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。全体的に石の向きも統一性がなく、やや乱雑な積み方である。 ・石材は不定形で、規模も大小混在する。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のズレが多く見られる。また、欠損も見られる。
石垣の変遷	・絵図には描かれていないことから、明治以降に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5052	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法	布積	
方　位	東				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

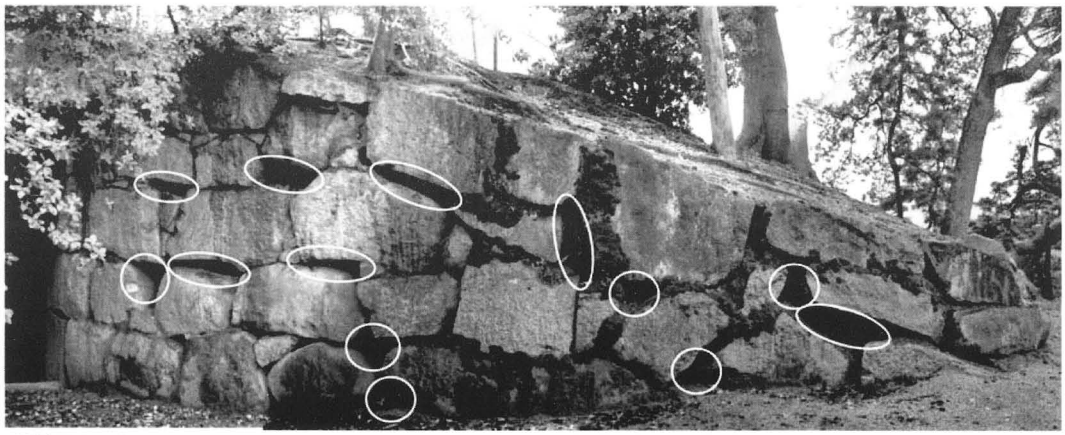


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.99	6.99	2.6	2.6	0.83	90	90	87	80	82

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



間詰石のヌケ

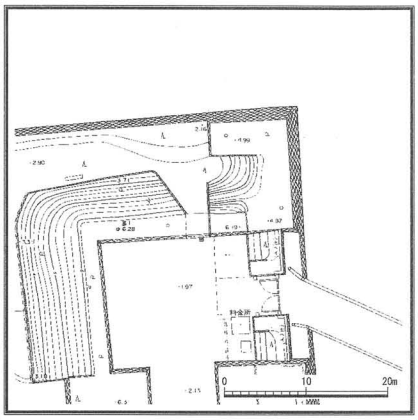
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約2.6m、全長は天端で約7.0mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。左隅角はやや曲面的な積み方となっている。右隅角は割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模もほぼ同一であるが、一部大ぶりの石材が見られる。石垣面が不揃いである。 ・両隅角とも算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から、新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5053	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置	
石垣部位	門				石積工法	布積		
方　位	西				角石（算木） 左			
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右	切石		
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	埋門				石材	花崗岩		
転用石	無			刻　印		無		

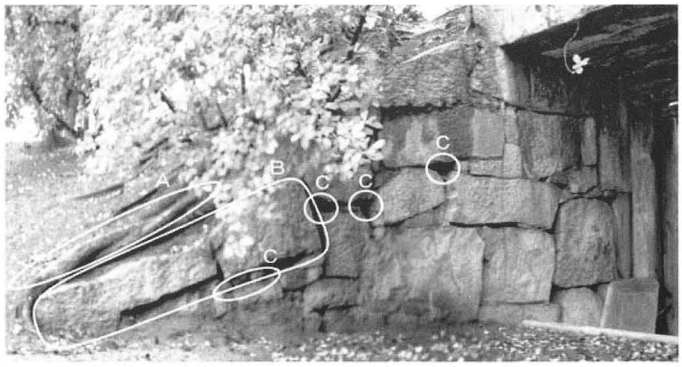


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			t12						s2			a2	b2	B

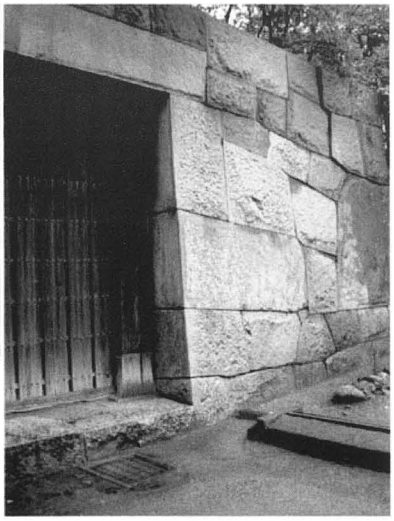
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.12	5.57	0.23	1.90/2.45	3.03	-	90	90	90	85

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．天端石に木の根がかぶる
B．木の根の影響で少々ズレ出し
C．間詰石少々ヌケ



※表（右側）に比べて裏側は石材の加工度が低い

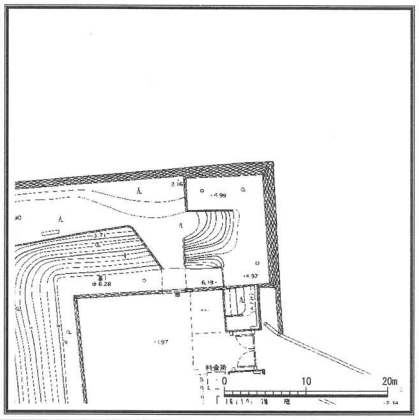
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の桝形南面石垣の開口部の西面石垣である。 ・高さは約3.0m～0.2mと変化する。全長は天端で約6.1mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。左隅角は地盤にすり付く。桝形の背後ではやや乱雑な積み方が見られるが、桝形に面する右隅角は切石を用いて積み上げられている。 ・石材はやや扁平の方形で、規模は大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・天端付近に成長した樹木の根による築石のズレが見られる。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から、新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5054	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	すりつけ			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

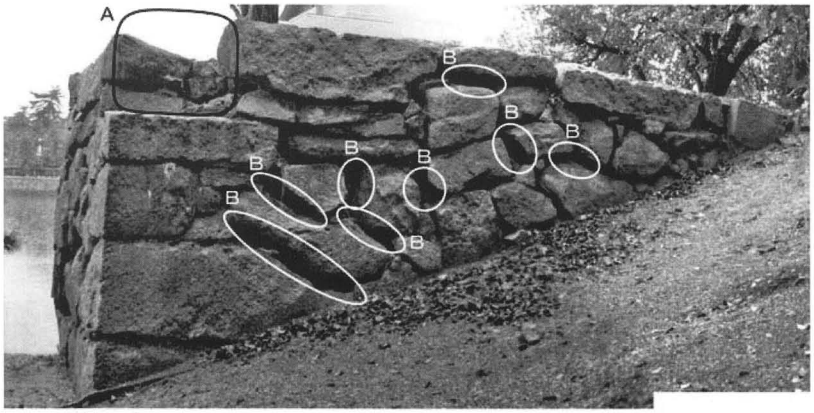


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1							s2	r2		a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	0.73/4.94	-	1.61	1.92	0.2	87	87	83	86	-

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



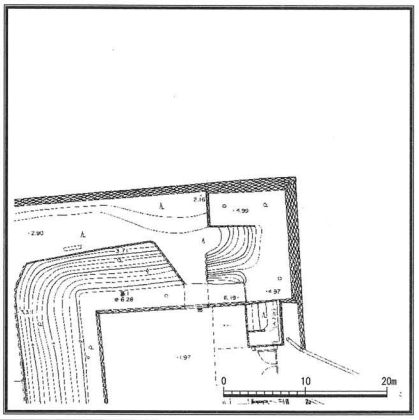
A．天端石欠損
B．間詰石のヌケ

備　考	すり付け	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東北部の南面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.9m、全長は天端で約5.6mである。 ・勾配は83度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は地盤にすり付けである。 ・石材は方形で、規模はやや小ぶりのものが多い。天端はやや扁平の石材が積まれている。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・左隅角上部の石材が欠損している他、焼損を受けたと思われる石材が見られる。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から、新郭造築期に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

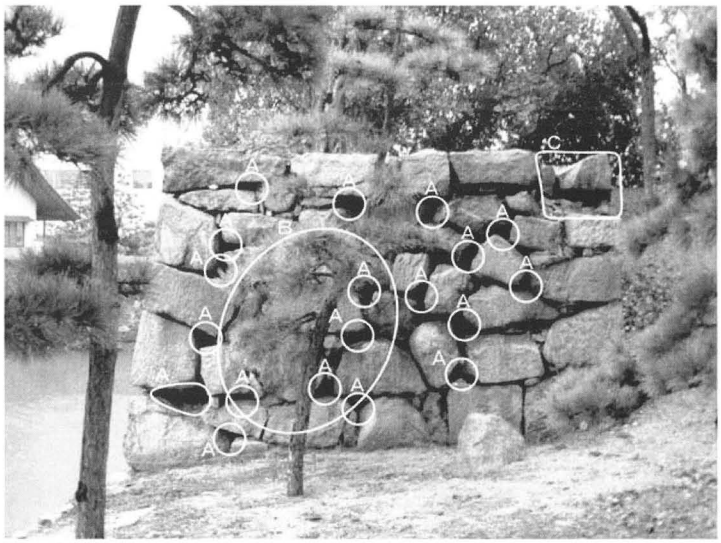
石垣番号	5055	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1		s2					s4			a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.33/0.67	4.56	3.01	2.62	2.47/1.68	79	89	87	87	87

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．間詰石のヌケ
B．わずかなハラミ
C．天端石の欠損

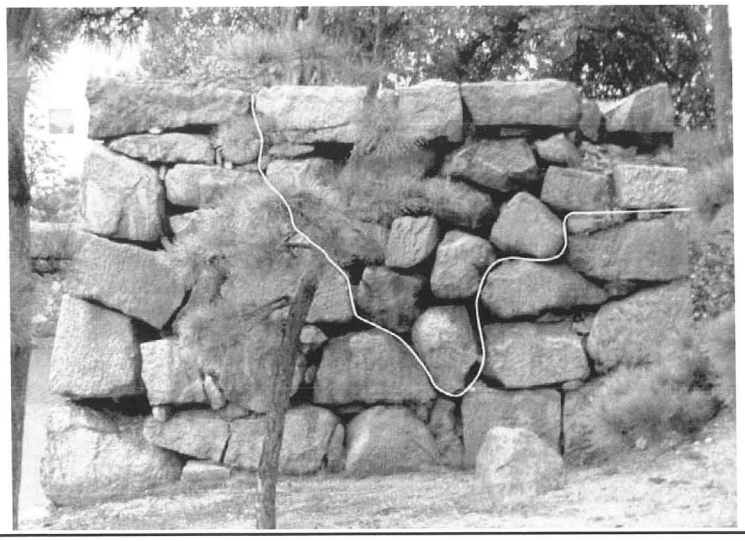
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東北部の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約2.6m、全長は天端で約4.0mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模はやや小ぶりのものが多い。天端はやや扁平の石材が積まれている。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが多く、中央部分ではハラミによる石垣の変形が見られる。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等の記録から、新郭造築期に築造されたと考えられる。

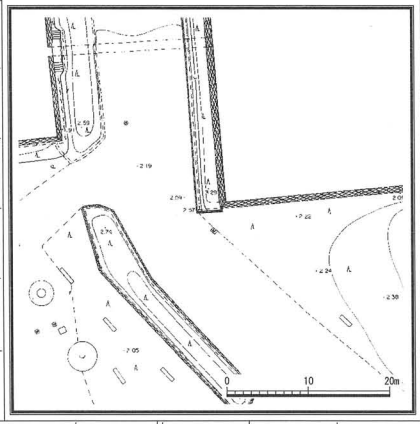
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角近傍から右隅角上部に至る谷形の目地	谷形中側	花崗岩	方形割石丸み	中側石材が小ぶり	割石谷積	谷形部の積み直しか築造時のもの
	谷形外側	花崗岩	方形割石		割石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5056	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石(算木) 右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

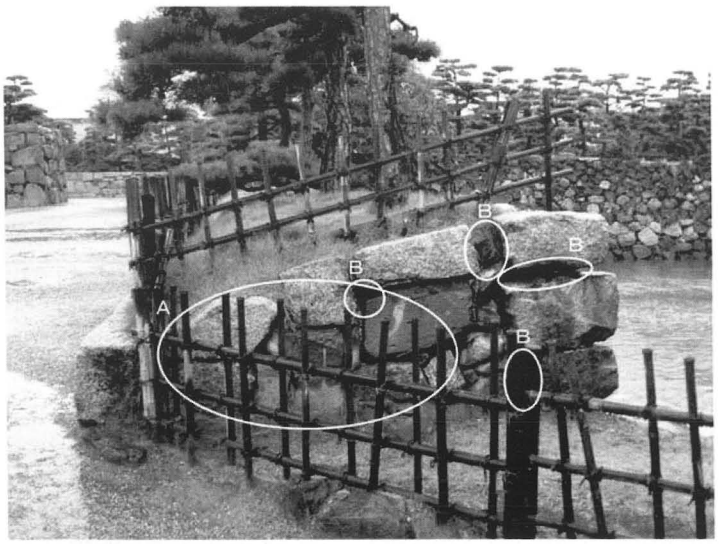


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2						s12			a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.73	2.8	0.39	－	1.18	－	89	83	90	84

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．少々ズレ出し
B．間詰石のヌケ

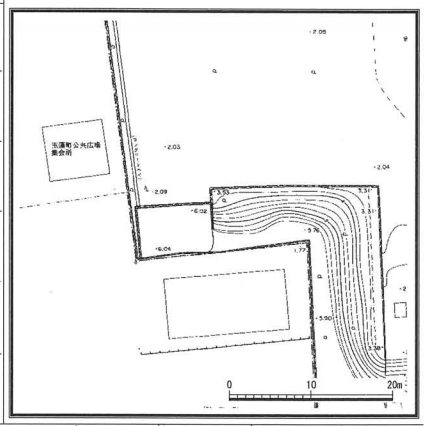
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場北部の土塁の裾石垣である。 ・高さは右端で約1.2m、全長は天端で約2.7mである。 ・勾配は83度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は地盤にすり付けである。 ・石材は方形で、規模は標準的なものが多い。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のズレが見られるが、積み方に起因するものと考えられる。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』には描かれていないことから、少なくとも生駒期にはなかったと考えられる。 ・『小神野夜話』等の記録から、松平初期ないし新郭造築期に築造された可能性が高いと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5057	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	（古）太鼓門				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

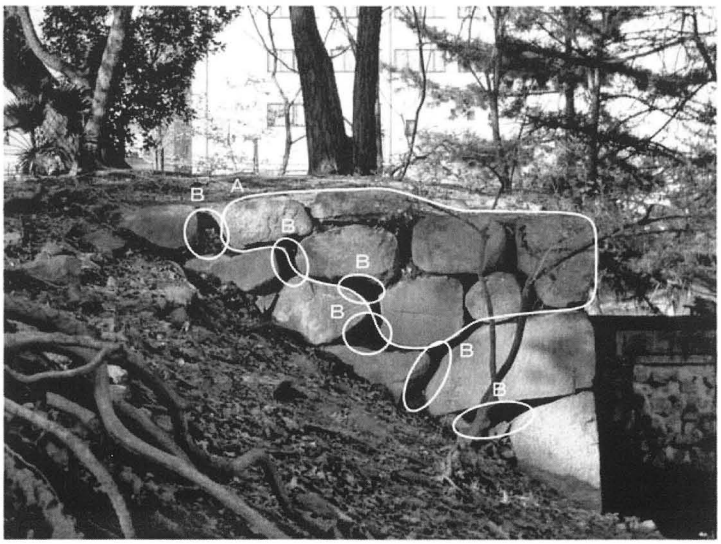


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好		n1						s23			a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.34	-	0	-	2.32	-	-10	-2	88	86

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．わずかにズレ出し
B．間詰石のヌケ

備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月 9日